

うして、胡麻鹽の三分刈、私より八つばかりも年上の媪さんだから、お察しを願ひたい。

——五日以前、暮方です。膳に向つた、電燈を点けようといふ處へ、電話が掛つて、家内が取次に出て、……「小山でございます、はい、あなたは、はあ、雪の家さん。」どうも雪の家といふ響き、何、響くほどの廣さぢやない。あの手狭ですから、直ぐそこに、馬鹿な……受話器に向つたものの顔も白いやうに聞えて優しい名だな、と思ひますと、はい、と受けて居ましたつげ。

——おわすれかも知れませんが、二十四五年前に、お目に、かゝつた切ですが、間淵の妹です。間淵は昨年なくなりました。けれど自分で一度お目にかゝりたいと思ひながら、ついかゞひそびれて居りましたところ、このごろ、そちこち、新聞などで、名前を、寫眞を、見受けますし、ところも分りましたから一寸お目にかゝりたい。「然ういつて……二の橋の、きこえたでせう、おつな名の待合から。」笑ひ乍ら、「大分、婆さんの聲、お茶と一緒に、お生憎。……」分つた、分つた、斷つてもらはう。「い、んですか。」「勿論、久しく煩ひましても可厭な言種だが、とに角だ、寝て居るからおいで下すつても失禮します、いづれそのうち、ご挨拶だ。……」

——あとで、——おだいじに又折を見ましてで電話を切りましたが、誰方？といつて、家内が聞きます。

その時話した事ですが、さあ、もう十四五年も前だつたらう。……馳走酒のひどいのをした、か飲まされ、こいつは活がい、と強ひられた、黄肌鮪の刺身にやられたと見えて、家へ歸つてから煩つた、思ひ懸けず……それがまた十年ぶりかで、ふと出會つた舊い知己で、つい近所だから、と裏長屋へ連込まれた……間淵がそれだ。——いやそれなんです——
足の短い、胴つまりで肥つた漢子の、みじめなのが抜衣紋になつて、路地口の肴屋で、自分の見立てで、其の鮪を刺身に、と誂へ、鹽鮭の切身を竹の皮でぶら下げてくれた厚情を仇にしては濟まないが、ひどい目に逢つたのを覚えて居るだらう。これが間淵。その漢子の妹だよ、いま電話のかゝつたのは——と家内に。

柳 雪
が、妹には、逢つたといふより見た事があるかないか、それさへよく覚えて居ない。——思ひ出せば、その酒と鮪の最中、いや、灘の生一本を樽からでなくつちや飲めない、といつた一時代もあつたが、事、志と違つて、當分かくの通り逼迫だ。が、何の、これでは濟まさない、一つ風並が直りさへすれば、大連か、上海か、香港、新嘉坡あたりへ大船で一艘、積出すつもりだ、と五十を越したらう、間淵が言ひます。此の「大船で一艘積出す」といふのが若い時から其の男の癖だつた。話の中に、一人娘は、七八ツの時から、赤坂の藝妓家へ預けてある、といつたのも、然ういへば記憶がある。

——亡くなつた、といふ電話だが、あとさきの様子から待合に縁がありさうに思はれる。
その節、取りまぎれて、折返しとは行かなかつたけれども、二月とはおかず、間淵の侘住居を
訪ねたが、もう何處かへ引越した。行くさきさへ、其の邊で聞いても分らなかつた、といふ始
末なのですから。

(電話は聞きながしにして置かう。)

(義理の悪いことはないんですか。)

(言ふにや及ぶべき。)

晩酌で、陶然として、そのまゝ、肱枕でうたゝねといふ、のんきさではありません。急ぎの仕事
に少し疲れて居た時であつたのです。

ところが何うです、その翌日、まだ朝のうち、玄關で早口に饒舌つて居る女の聲がして、すぐ
に取次のいふのを聞くと、年をとつては氣ぜはしい、堪へ情がなくなつて訪ねて來た。しかへ、
の口上。起きられぬほどの容體でなければ一寸逢ひたい、と昨夜の今朝で、其の間淵の妹が追掛
けてやつて來ました。

不精から、面倒くさいといふばかり、逢つて差支へは些ともないのです、それに白山。——麻
布からは大抵の苦勞ぢやない、勿論斷る法はありません。玄關さきの座敷へ通させ、仕事場の小

刀をおいて出て逢ひました。

(あ、あ、さてお久しいことやぞや、お懐しい。)

申しては驕りの沙汰だが、「ことやぞや」ではお懐しいがられたくない、ところへ、六十近いお
婆さんだから、懐しさぶりを露骨に、火鉢を押して乗出した膝が、襪襠の黒袴。袖たか、何
だか、地紋のある焦茶の被布を着て、その胡麻鹽です。眉毛のもじやくも是非に及ばぬとして、
鼻の下に薄髭が生えて、四五本スクと刎ねたのが、見透される。——此の性格、何とお思ひなさ
います。」

(——と話した時、小山直楨は眉を擧めたのであつた——)

「……餘儀ない次第と申さうか、了見違ひと申さうか、やがて、眞夜中に此の婆さんを見なけれ
ばならない羽目に立到りました時は、此の面相にして、白を着て、黒い被布です、朱い袴を穿い
て居たのだから、その不氣味さをお察し下さい。

その朝だつて、家内が挨拶に出ようといふのを、私が差留めたほどでした。

(まことにしばらく、……お珍らしい。)

柳 雪
と、時に、挨拶をするのも上の空で、人様の顔を失禮だが、うつかり見まもつて居るうちに、
吃驚するやうに、思ひ出したのは、私が東京へ出ました當時「魔道傳書」と云ふ、變怪至極な本の

挿畫にあつた老婆の容體で、それに何となく其のまゝなんです。

——「魔道傳書」——ようございませうか、勿論、板本でなし、例の貸本屋を轉々する寫本でなく、實に此の婆さんの兄の間淵が秘藏した、半紙を部厚に横綴の帳面仕立て。……都合があつて、私と二人で自炊をして、古襦袢、ぼろまでを脱ぎ、木綿の帯を半分に裂いて屑屋に賣つて、ぼんぼち米を一升炊きした、其の時はそれほど懇意だったので。——また大食ひな男で、一升一かたけへのりの勢。机を賣り、火鉢、火箸から灰を賣食といつた時でも、其の「傳書」は手離さなかつた。尤も澁を刷いた厚紙で嵌込の蔽があつて、それには題して「入船帳」。紙帳も蚊帳もありますか、煎餅蒲團を二人で引張りながら、むかし雲助の晝三話。——學資を十分に取つて、吉原で派手をした、また其がための没落ですが、従つて家郷奥能登の田野の豊熟、海山の幸を話すにも、その「入船帳」だけは見せなかつた。もう其の頃から、「大船を一艘」が口癖で、たゞし時世だけに視野が狭い。……香港、新嘉坡といはないで、臺灣、旅順へ積出すと言ひます……そこいらの胸算用——計畫の覺だ、と思ふから、見る氣の起る筈ありません。

間淵は、名さへ洞齋といひました。家は祖父の代から醫師なのを、洞齋本人は法律が目的で、勉強をするのは、能登では間に合はない。おなじ縣でも金澤だけにありました専門學校へ通ふのに、私の家を宿にした。——賭つき間貸と稱へる、餘り嬉しくもない、即ちあれです。私との縁

はそれなんです。

やがて、間淵が東京へ出て、三年目かに、私も……申すはお恥しい、今も此の通りですが、志を立てて上京した。とつか、り草鞋を脱いだのが、本郷元町にあつた間淵の下宿で、「やあ、よく来たね、」は嬉しいけれども、旅にして人の情を知る、となると、何うしても侘しい片山家の木賃宿。いや、下宿の三階建の構だつたのですが、頼む木蔭に冬空の雨が漏つて、洋燈の笠さへ破れて居る。ほやの龜裂を紙で繕つて、崩れた壁より、もの寂しい。……第一石油の底の方に淀んで居る。……然うでせう、下宿料が月の九つ以上も滞つた處だから、みじめな女郎買ぢやないけれども、油さしも來やしない。旅費のつかひ残りで、すぐに石油を買ふ體裁、なけなしの内金で、其の夜は珍らしく肴を見せた、といふのが、苦澁いなまり節、一缺片。大根おろしも薄黒い。が、「今に見たまへ、明日にも大船で一艘臺灣へ乗出すよ。」で、すぐに其の晩、近所の寄席の色ものへ連出して、中入の茶を飲んで、切端の反古へ駄菓子を撮んで、これが目金だ、萬世橋を覺えたまへ、求肥製だ、田舎の祭に館屋が賣つてるのは撰が違ふ、江戸傳來の本場ものだ。黒くて筋の入つたのは阿蘭陀煉、一名筏羊羹。おこしを食ふのに、ばりく音を立てなさんな、新造に嫌はれる、と世話を焼いて、歸途が、屋臺の牛めしです。寢床で話しながら遣らかさう、と精進揚を買つて歸る。易くて腹にたまつていゝと云ふうちにも、油ものの好きな男で。

——ですから、のちに、私が其の「魔道傳書」のすき見をした時も炬燵櫓……(下へ行火を入れま
す)兼帯の机の上に、揚ものの竹の皮包みが轉がつて居ました——

然ういつた趣で、啖ふ事は、豆大福から、すした、蕎麥だ。天どんなぞは驕の沙汰で、辻賣の
するとん、どうまた悟りを開いたか、茶めし、餡かけ、麥とろに到るまで、食ひながら、撮みな
がら、その色もの、また講釋、芝居の立見。早手廻しに、もうその年の酉の市を連れて歩いた。
従つて、旅費の残りどころか、國を出る時、祖母が襟にくけ込んだ分までほぐす、羽織も着もの
も、脱ぐわ剥ぐわで、暮には下宿を逐電です。行處がないかと思ふと、其の頃の東京は、どんな
隅にも巢がありました。裏長屋の九尺二間へ轉げ込むのですが、なりふりは煤はきの手傳といつ
た如法の兩人でも、間淵洞齋が又聲の尻上りなさへ齒切れよく聞える辯舌爽で、然も二十前
に總持寺へ參禪した、といふ度胸胡坐で、人を食つて居るのですから、喝、衣類調度の類、黄金
の茶釜、蒔繪の盥などは、おツつけ故郷から女房が、大船で一艘、兩國橋に積込むと、こんな時
は、安房上總の住人になつて饒舌るから、氣のいゝ差配は、七輪や鍋なんぞ、當分は貸したもの
です。

徒士町の路地裏に居ました時で。……京では堂宮の繪馬を見ても一日暮せるといふ話を聞きま
す。下谷のあの邊には古道具屋が多いので、私は希望が希望だったから、二長町や柳盛座の芝居

の看板の前には立ちません、若い時だから寒さには強い。ぶら／＼何を見て歩いて居たかは、
ご想像に任せますが、空腹の目を窪まして長屋へ歸ると、二時すぎ。間淵は見えないで、その煎
餅蒲團のかゝつた机の上に、入船帳の蔽を抜けて、横綴の表紙が前申した、「魔道傳書」、題ばか
りでも、黙つて見たまゝで居られますか。いきなり開けた處に、變な、可訝しな、繪があつたの
です。

若い、優しい女が裸體、いや、裸體ぢやないが、縁の柱に縛られた、それまでのかわい抵抗、
惱亂が思はれる。帯も扱帯もすり落ちて、絡つた裳も絲のやうに撚んだばかり。腹部を長くふつ
くりと、襟のまつた、柔かい兩の肩、其の白さ滑かさといふものは、古ぼけた紙に、ふはりと浮
く。……

が、もう斷念めたのか、半ば氣を失つたのか、聊かも焦躁苦悶の面影がない。弱々と肩にもた
せた、美しい鼻筋を。……口を幽に白齒を見せて、目を睨いたまゝ、恍惚して居る。

それを、上目づかひの頤で下から睨上げ、薄笑をして居る老婆がある、家造りが茅葺ですから、
勿論、遣手が責めるのではない、姑が虐げるのでもない。安達ヶ原でない證には、出刃も焼火箸
も持つて居ない、澁團扇で松葉を燻して居ません。唯黒い瓶を一具、尻からげで坐つた腰巻に引
きつけて、竹篋で眞黒な液體らしいものを練取つて居るのですが、粘々として見える。

柳 雪

老婆は白髪の上の處に、

(やうゆうば、術を施すのところ)

をかした口調です——(術を施すのところ)老婆は忽ち見て取つた。繪も靨面だから解りました。が、其の(やうゆう)が分りません、かなで書いただけで、それは三十年餘りも経つた、いまに於いて何ういふ意味だかわかりません。が……さて續いた繪なんです、尤も、めくるとすぐに細かい字で、ぎつしり二三枚かき込んでありましたけれども、川柳にもありません、うまい事をいつた、(讀本は繪のところが出て子に取られ)少年はきれいな婦の容易ならぬ身の上が案じられますから、あとを性急に開ける、と何うです。

立つた亂れ姿で縛られたのが、今度は崩れたやうに腰をついて、膝を折りかゞめに、片足を、ぐつたりと、濡縁に髪を流し、白く蹴出した、その一本のふくら脛の膝から下に、むくくと犬だか猫だか浅間しい毛が生えて、まだ女のまゝの指尖が獣の鱗爪に屈まつて縮んで居る。

——(やうゆう)です、ね、老婆は、今度は竹篋を口に啣へて、片手で瓶の蓋を壓へ、片手で「封」といふ紙きれを、蓋の合せ目へ禁しながら、ニヤリとして居る。

その、老婆に、形も面も、何處となく肖て居るのですよ。唯今お話をしました、——二の橋の待合から電話を掛け、當分病氣だといつて斷つたのに、すぐに翌日、白山の私宅へ來た。——

「——お懐しい。」と袴の膝を不慮に突きつけた、被布で胡麻鹽の間淵の妹。

一寸お待ち下さい。

「うゝ、うゝ、うゝ、おゝ、おゝ、苦しい。」

だしぬけに目の前の廁で、うめく聲がすると、ぱつたり戸を開けて出たのが間淵で、——こんがらかると不可ません。——兄洞齋です。

私が其の魔道傳書を覗いて居るのを見ると、

「や、いつ歸つた。」

といふが早い、引手繰るや否や、肥つて居るから、はだかつた胸へ腋の下まで突込んだ、もじやもじやした胸毛も、腋毛も、うつくしい、情ない、淺間しい、可哀相な婦を揉みくたにして、捻込んだやうに見えて、毛の生えた方も、白い方も、其のまゝ、瞼にちらついて、覺えて居ます。私は、ぱちくと瞬した。

「飛んでもない、こりや見せるもんぢやない、いや、見るもんぢやない。第一若いものが見ては大變だ……」

柳 雪 酷く腹が痛んで、私の歸つたのが夢中で分らなかつたから、うつかりした折からださうで……

澁菼豆の堅い奴を、自分で持つて行つて、無理に頼んで、うどん粉をこつてりと、揚物にさしたといふ、それに中てられたんです。

なか／＼、繪も二枚や三枚ぢやない、づつしり分厚に綴込んだ一冊で、どんな事が書いてあるか知れません。冒險的にも見たかつたのでありますが、牛若ほどの器量がないから、魔道妖異の三略には、それ切、手を觸れる事が出来なかつた。

六

「なあ、それにしても、ほんに／＼久しいものやて、にい……」

却説、袴を穿いた婆さんはいふのです。菴蓐を吹かしますが、取出すのが、持頃の呉縞らしい信玄袋で、何うも色合といひ、こいつが黒い瓶に見えてならなかつた。……

「あの時分」……

自分で尼、尼といふ、襟に大形の輪數珠も掛けて居ましたが、容體が巫女にも似て、兩部も三部も合體らしい。……「尼ども、兩親はとうになくなつて、もと／＼身上の足りぬ處を、洞齋兄の學資といへば、姉の嫁、私には嫂ぢやない、その里方から末を見込んで貢いで居つた處を、あの始末で、里をはじめ、親類もあいそを盡かせば、嫂も斷念めた。それやで、に、嫂の里へ引取つ

て養うてくれて居つた尼を連れて、東京へ、徒士町の長屋へ出向いたといふものは、嫂は縁切り、尼は又此の廣い世界へ棄てられた。島流し同様のものやつたが、にい——

人間の侘しい住居といふより、何やら、むさくるしい巢のやうな裡から、あなたは、小僧に——

然うです。千駄木の師匠、雲原明流氏の内へ、縁あつて弟子小僧に住込みました。

これは申すまでもありません。

「洞齋の兄の身に見ればぢや、にい、この妹をつれて、女房が上京するといへばや、當分だけなど、くらしをつける錢金の用意をして居て、一緒に世帯をするものと思つたのが、其のしだら魂膽や。つら當にも、其の場からでも、妹を奉公させる……また奉公もせんならん。翌日が日の糧にも困つた、あの逼迫やよつてに、すぐに口を見つけて、にい、わすれもせんぞに——あんたは其の千駄木へ。尼は、四谷へ、南と、北へ。……一日違ひで徒士町から分れたといふもんぢや。地方で結うたなり、船や汽車で、長いこと、よう撫でつけもせんだれど、これでも島田齧やつたが、にい。」

私は顔を見た。

柳 雪 「覚えておいでますかにい——一寸の間やつたけれど、おなごりが惜しかつたぞ。北と南へ。」

どつちが北だか、南だか、方角に途迷ひしたが、とに角分れたのは難有かつた、と思ひました。……それに、言はるれば、白粉をこつてり塗けた、骨組の頑丈な嫂といふのには覚えはあるが、この、島田鬚には、ありさうな記憶が少しもない。

「命さへあれば、にい、何處でどう、めぐり逢はんとも限らんもんや。したが、尼も、この奉公を振出しに、それは、それは太いこと、苦勞辛苦をしたもんや。」

こゝで、長々と身の上話が始まつた。が、くどいから略しませう。あり來りの事で、亭主が三度かはつた事だの、姑小姑に虐められた事だの、井戸川へ身を投げようとした事だの、最後に、淺間山の噴火口に立つて、奥能登の故郷の方に向つて手を合はせて、いまはといふ時、立騰る地獄の黒煙が、線香の脈となつて、磊々たる熔岩が艾の形に變じた、といひます。

一寸どうも驚かされた。豫て信心渴仰の大、大師、弘法様が幻に影向あつた。灸點の法を、その以心傳教で會得した。一念開悟、生命の活法を獲受して、以來、其の法を以て、遍く諸人に施して、萬病を治するに一點の過誤がない。世には、諸佛、開祖の夢想の灸と稱ふる療術の輩は多

いけれども。

「尼のに限つては、示現の灸ぢや。」

「——成程。」

「……昨宵も電話でのお話やが、何やら、ご病氣さうなが、どんな容體や。」

「胃腸ですよ、所謂坐業で食つて居ますから、昨夜などは、きりきり疼んで。」

「いづれ、運動不足や、そりやようないに。が、けど何でもない事や。肋膜炎、肺炎、腹膜炎、神

「ま、ま。」

「療治の用具もちやんと揃へて持合はせて居る、に。」

「まあ、まあ。」

「熱いと思うてかに、熱い……灸やから。は、は、は。微塵も、そりやない。それこそ弘法様示現の術や、たゞむすくとするばかり。」

「まあ、しかし。」

雪 「たゞ、あんだのものを使ふというては、火鉢の火を線香に取るばかりや。」

柳 弱つた。

「それやかとても、火道具はちやんとこ、に持つて居るがや、燐寸などは使はんぞ、艾にうつす附木には、浅間山祕密な場所の硫黄が使うてあるほどに。」

尙ほ弱つた。

「どうも、灸だけは……ですよ。」

「お嫌ひかに。」

「嫌ひにも、何にも。」

「好嫌ひは言うて居られんぞに、薬には。それやし、何せい、弘法様の……あんたお宗旨は。」

「ほつけです。」

「堅法華、それで頑固や。」

「いや、いやそんな事より、なくなつた母親の遺言です、灸は……」

「その癖、すゑられなざる様な事が澤山あるやろ、は、は、は。これでも昔は島田髻や。」

と口を開けて、それでも皮肉ではなささうに笑つた。

「時に、洞齋さんは、何の病氣で。」

と聞くと、

「中氣でに、四年越。」

私も、何も、皮肉でいつたのではなかつた、氣違も、癪さへ治すといふのに對して。——しかし四年越、中氣でなくなつた事をいつてからは、をかし、急に陰氣になつて、歸支度をする。蒸しものの菓子紙に包んで、一寸頂いた處は慇懃で却つて恐縮。納めた袋の緒を占めるのが兜を取つたやうで、嚴に居直つて、正午頃までに、見舞ふ約束が一軒。さて、とる年だし、思ひ立つた時に逢つて見たいのを、逢つて見ぬと、何時またお目にかゝれようと、それゆゑにこそ、といつて起つた時には、些ばかり妙な寂しい氣がしたのです。

人情ですか、争へない、それもあります。それに、自動車でなくつては運ばれない、嵩張つた手土産がありました。

「義理さへ缺けなければ。」

とあとでいふ家内の言については、使で禮を返しても、其の義理は缺けなかつたが——逢つて見たい時に逢つておかぬと、いつ又お目に掛れるか——まだ仕事場へ歸らない——送出して取つて返し、吸ひかけの巻蓑をまた撮んで、菓子盆を前に卵の花のなよよと白いのを見ながら、いま歸つた尼巫女の居どころを、石燈籠のない庭越に、ほのかに思ひうかべました。待合、雪の家。姪に當る、赤坂に藝妓をして居ると、いつか聞いたのが、早く旦那なるものにひかされたか、事情はとに角、心づもり二十そこいらで、まだ、若い。

柳 雪

この後見なり、客のとりまはし、家のきりもりをして居ると思はれる、その母親があるのです。妹ぐるみ打棄つた、……いや間淵洞齋が打棄られた女房の、後二度目の女房なのです。後添、後妻、二度目の嫁といつても、何となく古女房のやうに聞えますが、どうして、間淵と夫婦になつた年が、まだ、ほんの十五六。で、唯一度だけ、其の頃、私が、本所で逢つた事がある。……師匠明流の情で、弟子小僧に、住込んだ翌年の五月です。花時に忙がしい事があつて用が立込んだかはりに、一日お暇が出て、小遣を頂いた。師匠は大家でも弟子は小僧だ、腰の煙草入に其の銀貨を一枚「江戸あるき」とかいふ蟲の食つた本を一冊。当日は本所の五百羅漢へゆくつもりで、本郷通りを真すぐに切通し、寄席の求肥の、めがねへ出ました。すたくももので、あれから、柳原を兩國まで、鐵道馬車で、あとは又大歩行きに歩行くつもり、處が、馬車を下りる時、料金を拂はうとする、と、落したのか、すられたのか、煙草入がありません。小遣ぐるみ。あつと慌てたが、それだけちや濟まない。廣小路のあの群集の中で、しよぼくと監督の前へ出されたのですが、突出したとは言ひますまい。連れてつた瘦せた車掌がい、男で、確に煙草入を——洋服の腰へ手を當てて仕方をして——見たから無銭のりではありません、掏られたのです。よろしい、と肥つた監督が大な衣兜へ手を突込んで、のみ込んでくれました。羅漢たちの中には、苦しい斷食の業を積んだのがあります、思つただけでも足がすくむ。あ

りやうは五百體より一杯をあてにした、蕎麥も、ちらしも、大道の餅も頼張れない。……それ以上、弱つたのは煙草が飲めない。參詣はしましたが、龜井戸の境内で、人間恠うなると、目が眩みます、藤の花が咲いて居たか、まだだつたか、それさへも覚えて居ません。太鼓橋の池のまはりの日當りの石に、順禮の夫婦が休んで居て、どうでせう、女房が一服のんで居て、繼ぎはぎだが紅いところの見える、襦袢の袖で、

「アイ」

あいと脚絆の膝をよぢつて、胸を、くの字なりに出した吸付煙草。亭主が、ふつかりと吸ひます、其の甘味さうな事といふものは、……

餘計にかつ／＼して、息を切つて萩寺の方へ出たでせうか、眞暗三方といふ形、豫て轉居さきを端書で知つて居ました、曳船通の間淵の家へ辿り着いた。こゝで一片餉ありつかうし、煙草錢の工面をつけようと思ひました。處が何うです。——其の時分の事で、まだ藁葺の古家で、卵の花の咲いた、木戸がありました。柱に、「東海會社假事務所」と出て居て、例の大船で一艘積出す男は、火のない瀬戸の缺火鉢を傍に、こはれた脇息の天鵝絨を引剥したやうな小机によつつかつて、あの入船帳に肱をついて、それでも莞爾々々して居る……

柳 雪
「これ、お茶をよ。」

と破襖の次の間へ。

「何だ、焼芋、蕎麥、ごもく、豆大福、豌豆の入った——うふ、うふ、うふ。」
と尻上りの冴えた聲で、笑を肥つた腹へ揺つた。

「鼠が貿易をしましよ、そんなものを積んで大海を渡れるものか。その了見だと、折角あれだけの名家の弟子になりながら、小刀で蟻を刻んで居やしないかね。」

燕にくツつけてさ、それ、大かぶにありつく、とか云つて、買手が喜ぶものださうだ。いや、これは申戯よ。船はちゃんころでも炭薪や積まぬといふのが唄にもある。こんな小さな家だつて、これは譬へば、電氣の釘だ。捻る、押すか、一たび指が動けば、横濱、神戸から大船が一艘、波を切つて煙を噴くんだ。喝！」

と大きな口をあげながら、目を細く、頻に次の間を顔で教へて、目顔で知らせて、

「お茶を早くよ。」

貧しい盆に茶碗をのせて、氣候は、そんななのに、もう白地の浴衣です。髪だけは艶々と島田に結つて居ました。色の白い吃驚するほど人柄な、その若いのが、ほつと色を染めて、黙つて手をついた頸脚が美しい。

「きみ、小山、今度の妻だよ。」

その時、ついた手が白く震へた。

「冬といふよ、お冬です。こりや親しい同縣人だ。——お初に、といはないかね。」

「お初に。」

といつた時、耳まで紅く染まつた。それなり襖の影へ消えました。私は一息に空腹へ飲んだのですが、それは茶ではないのです。冷水に、ちらく和白いものが浮かしてある、香煎は色がありません、あられか、菓子種か、と思つたのが、何と、志は甘かつた、が、卵の花が浮かしてあつたんです。毒にはなりますまい、何事もなかつた處を見ると、枸杞の花だつたかも知れませんが、白く、細かくて、枸杞は薬だといひますから。

然うと知つたら、言ひますまいものを。……水は、實は途中で、三度ぐらゐ飲んで居ましたから、東海會社社長の顔を見ると齊しく、息が切れる、茶を一杯、といつて、それから焼芋、蕎麥、大福の謎を掛けた。申すまでもなく煙草入をなくした顛末を饒舌つてからですが、此に對する社長の應對は、たゞ今お聞かせ申した通り。

湯を沸す炭もなく、茶も切れて居たのです。年も二十以上違つて居る。どうしてこんな細君を。いや、あの、片時も手離さない「魔道傳書」を見るがい、お冬さん、上品な、妍美い娘は、魔法に、掛けられたものでせう。

千駄木へ歸つてから、師匠に鐵道馬車の監督の話をする、氣に入つた。其の寛容と深切に對しても、等閑に棄てては置けない、料金は翌日にも持参しなさい。で、二日ばかりおいて、兩國まで、その持参です。……なくなつたお小遣の分まで惠與に預る。……餘程曳船へ廻りたかつた。堅菰豆ぬきの精進揚か、いや、そんなものは東海會社社長の船には積むまい。豆大福、金鰐か。それは新夫人の、あの縹緞に憚る……麻地野、鹿の子は獨り合點か、しぐれといへば、五月頃。さて幾代餅は何處にあらう。卵の花の禮心には、碓まき、紅梅餅、と思つただけで、廣小路へさへ急足、そんな暇は貰へなかつたから訪ねる事が出来なかつた。

盆やすみに、今日こそと、曳船へ参りましたが、心當りの卵の花垣は取拂はれて、窪んだ空地に、氷屋の店が出て居ました。……水溜りに早咲の萩が二つ三つ。

然ういつたわけで、それ切に成つたのですが、あと十何年、不意に、また間淵洞齋に出會つて、悪酒にあてられた事を申しました。——

それは、白山の家を出て、入費のかゝらない點、屈竟ばかりでなく、間近な遊山といつてもいい、植物園へ行つて、あれから戸崎町の有名な豆腐地藏へ参らうと、御殿町へ上ると、樹林一構、奥深い邸の門に貼札が見えたのです——驚流狂言、開興。入場歓迎。——日づけが當日、その日です。時間も丁どでありました。

舞臺では、もう「宗八」といふのがはじまつて居たのですが、廣書院の一方を青竹で劃つただけが、其の舞臺で、見物席は三十疊ばかりに、さあ十四五人も居ましたか、野分のあとの庭の飛石といつた形で、ひっそり、氣の抜けたやうに、わるく寂しい。

例の、坊さんが、出来心で料理人になつて、角頭巾、黒長衣。と、俎に向つた處——鮎と鯛のつくりものに庖丁を構へたばかりで、鱗を、ふき、魚頭を、ぐわりり、といふだけを、啗る、あせる、狼狽へる、胴忘れをしてとぼん、として居る。

海豚が陸へ上つた恰好です。仕切の竹で、これと向合ひ、まばらな見物の先頭に、ぐんなりした懷手で、悄れた鰭のやうに袖をすぼめて居た、唐棧柄の羽織で、黒い前垂をした、ぶくりとした男が、舞臺で目を白くする絶句に後退りをしながら振返つたのが、私に氣がつくと、其のま、……熟と視た。

開演中です。居膝るやうに、密と傍へ寄つて來て、
「小山ぢやないか。」
「お、。」

「出ようよ、靜に。」
氣の氣らしくて、見て居られない舞臺だから、誘ひ手のある引込に會場を出たのです。

「何、植物園から豆腐地藏、不如、菟藟閻魔にさ。煮込んでも、味噌をつけても、浮世は其の事だよ。俺も此頃ぢや、大船一艘、綾錦でないまでも、加賀絹、能登羽二重といふ處を、船も、ひいどろにして、金魚ぢやないが、紅、白、ひらくとした處を、上海あたりへ積出すほどの決心だ。一船のせよう。あひかはらず女の出来ない精進男に、すぢか、竹輪か、こつてりとした處を食はせたい。いや串戯はよして、内は柳町、菟藟閻魔のすぐ傍だ。」

魚頭をつぎ、鱗をふく(宗八の言にありますね。)私窩子でもやつてるのぢやないか、と思つた。風手が又似て居ました。柳町の裏長屋で……魚頭も鱗もない、黄肌鮪に弱つた事は、——前刻に言つた通りです。

其の黄肌鮪だか、鬢長鮪だかと一緒に、悪酒を、なめ、なめ、

「あひかはらず、此の體だ、といふうちにも、一昨々年までは、臺灣に一艘帆を揚げて居たんだよ。處が土地の有力者が、妻に横戀慕をしたと思ひたまへ。それのかなはない腹癒に、商會に對する非常な妨害から蹉跌没落さ。たゞ妻の容色を、臺北の雪だ、「雪」だと稱へられたのを思出して落城さ。」

と、羽織を脱ぐと、縞の女衣の、振が紅い。ニヤリとしながら、

「お冬、お冬、珍しい男を連れて來たぞ。誰だ分るか、分るまい。」

薄暗さうな次の間で、人むかへの起居の氣配が、と寂然やむと、

「お聲で分りました。入らつしやるなり。……小山さんです。」

間淵が菟藟のやうな色をして、懐手の貧乏ゆすり、

「酒だ、酒だ、酒を早く。」

人間どう間違へても、自惚のないものはないとか言ひます……少くとも私は……人として、一生に一度ぐらゐは惚れられる。

無理な酒もすごしました。しかし、歸るまで、其つ切、お冬さんは、顔も姿も見せなかつた。

——先に曳船通、のちに柳町の、そのお冬さん、今は二の橋邊の待合雪の家に居るらしい——白山を訪ねた尼の歸つたあとで、私は、庭の卵の花を見ながら、江戸の名畫の雪景色を可懐しく思つたことは、いふまでもありません。

——お聞き下さるやうだから續を話ませう。——

處で、其の雪の家の胡瓜形の磨硝子の掛つた土間に立つてから、久しくお待ちいたしました。が、しかし待つて居たのは、お聞き下さる、あなたではない、私です。南瓜です、は、は、は、が、待つ間はなかつたのです。小女がすぐに引返し、取次いで二階の六疊——八疊つまりですか……それへ通した。

真中に例の卓子臺。で欄間に三枚つゞきの錦畫が額にして掛けてある。優婉、娜麗、白膩、皓體、乳も胸も、滑かに濡々として、まつはる緋縮緬、流れる水淺黄、誰も知つた——歌麿の蟹女一集の姿。ふと、びいどろの船に、紅だの白だのひら／＼するのを積むといった、間淵洞齋の言を思ひ出した。……いつては、あれだけの繪師に相濟まないが、か、げてあるのは第何板、幾度かへして刷つたものだか、線も太ければ、勿論厚肉で、繪具も際どいのお察し下さるやうに。いづれ二三人よんでお附合に一杯、といふ心づもり。尤も家内の心づけ、出す入らずに、なにがしの商品切手といふのを、水引で袱紗で懷中にして、まじ／＼、其處に控へて居る年配の男を次手にお察し下さるやうに——

で、酌人は酌人、ひらく／＼か、ちら／＼、として、さてお肴、が、何分刺身はあやまる。……菟菟、菟菟がい。おでんとしよう、柳町の事を思ひながら一方を見ると、歌麿の蟹女と向合つて「發菩提心」といふ横額が掛つて居る。

亡くなつた洞齋が遣りさうな好みだ、と思ふと、床の間の置物が鼻の穴の目立つて大きい、眞黒な土の達磨。

花活に……菖蒲にしては葉が細い。優しい白い杜若、それに姫百合、その床の掛物に拂子を描いた、樂書同然の、また悪く筆意を見せて毛を刎ねた上に、「喝」と太筆が一字睨んで居る。杜若、

姫百合の、およそ花にも恥ぢよ、「喝。」何たるものぞ、これだから、私は禪が。……

はてな、雪の家の、この旦那なるものが變に「喝。」がつた難物かも計られぬ。……

「あ、はじめまして、あなたが間淵さんのお娘ご。」

其處へ、一枚着換へた風俗で、きちんとして、茶を持つてきたのが、むかし、曳船で見たお冬さんに肖如……といふうちにも、家業柄に似ず顔を紅うした。而うして私の顔を視ると、一寸曇らせたやうな眉が、お冬さんより、顰んだ形に迫つて居ます。お母さんは、目鼻だちがばらりとして居たのです。

時宜挨拶が一寸交されました。

「お父さんは、」

中氣、とも言ひかねて、

「久しくお煩ひだつたさうですね。」

「え、四年越……」

「それは、何よりご看病が大變でしたね。で、甚だ何ですが、おなくなりなすつたのは、此家で。」

「はあ、あの病氣の發りましたのは内だつたんですけれど、こんな稼業でせう、少しは身體を動

かしてもいゝと、お醫師がおつしやいましてから、すぐ川崎の方へ……あの、知合の家が廣うございますもんですから、其の離室のやうな處へ移しましたんですの。」

——喝旦那の住居らしい……とするとお冬さんは、其方で暮して居はしないか。逢へない仕儀であらうも知れない。——又お察しを願ふとして——實は逢ひたかつた。尤も白山へ來訪をうけた尼刀自へ返禮に出向ひたいのに、いつはりはないのですが、そんな事はどうでもいゝ。又妙に、其の尼にも、いま差當つて娘にも、お冬さんの消息が、さそくに口へ出なかつた、そのわけは、前述の「魔道傳書」を見ない方には、お解りになりますまい。怪しからん事であります。

「何にしましても病氣が病氣だもんですから、あせりにあせり抜いて、氣ばかり荒くなりましてね、傍を困らせ抜きますうちにも、あの病氣に限つて、食べものの難題ですの。え、一番困りましたのは毎日見ます新聞の料理案内と、それにラヂオのご馳走の放送ですのよ。鴨、鳥はいゝとして、山鳥、疝子、豚でも牛でも、野菜よし、魚よし、料理に手のかゝつたものを見ると、聞くと、そのまんま、すぐ食はせる、目の前へ並べらるでもつて、口が利けただけに尙ほ不可ません、少しも堪忍をする氣はなし、其場即座につて、間に合はないと、殺すか、ほし殺せなんですもの……どんなに母を泣かせたでせう、小父様……」

私は吐胸をつきました。どんな意味でも、此の場合の「をぢさま。」は身に應へた。今度は此方が赤面して汗になつた。

「魔法でもつかはないぢや、そんな事は出来ません。」

その際、祕傳書を手に入れようといふ、深き慮があるものなら、もつと辛抱をしたでせう。せき心で、お母さんとは、初めて聞くと、少々加減が悪くつて、といふんです。川崎とすれば固よりの事、此家に居た處で、病氣だといへば……と思ふも遅い。既に「をぢさま。」と聞いた時、もう私は居た、まらなくなつたのです。

發菩提心……向合つた欄干の硝子の船に乗つた美女の中には、當世に仕立てたらば、其のお冬さんに似たのがたしかに。あ、發菩提心……額の下へ、もそく不手際に、件の紅白水引を、端つくるひに、ぴんと反らして差置いて、すぐに座を開くと、

「まあ、をぢさま。」

如何にも案外と、本意ない様子で、近所へ療治を頼まれて行つて居る、いまにも歸るでせう。姨がといふ。尼刀自の事です。お顔を見たら、どんなに喜ぶか知れませんが。女中も迎ひに出しました。一寸様子を、と襖を抜けるやうに、白足袋で、裾を紅入に二階を下りた。

柳 雪
間敷もなささうですが、居馴染まない場所は、東西、見當が分らない。十番は何方へあたるか、二の橋の方は、と思ふと、すぐ前を通るらしい豆腐屋の聲も聞遠に聞え、窓の障子に、日が映す

ともなく、駭るともなく、漠として、妙に内外が寂然する。ジンと鐵瓶の湯の沸く音が何處か下の方に靜に聞え、ざぶんと下屋の縁側らしい處で、手水鉢の水をかへす音が聞える。い、年増、もう三十七八にならうか知ら、お冬さんが寢床を起きて出たのではないか、こんな時、厠のあたりに、けはひがするといふものは、何だか、人影が幻に立つやうな氣がするものです。喝！ あ、驚いた。掛けものめ。

「あつ！ は、は、は。」

いきなり、男のやうに笑ひかけて、

「驚かさう思うて、故と、こつそりと上つて來たぞに。心易立てや。ようこそ、ようこそ、こんな處まで、嬉しいこつちや。や、もう洞齋兄の事や、何の事や、すぎ去つた。そんな挨拶はさらりとおくこつちや、にい。縁あればこそ、生あればこそ、北と南と、何十年分れたものが訪ひつ訪はれつ、やぞに。それに、さういふ行儀は何ぢや、袴はいたり、膝にお手々をちやんとしたり、早や、其の手をぬいと伸ばいて、盃を持つ格好に、なう。」

人に口は利かせない。被布から皺びた腕を伸ばして、目八分に、猪口をあげる指形で、

「何とかいうたに、それ、それ、乾盃、あれに限るぞに、い、事ぢや。洞齋兄は澤山は飲まなんだけれど、島田鬚の妹は少し飲るがやぞ。これでも、古馴染や、遠慮はない。それに何處へ來

なされた思うて、そのやうに堅うして。……花柳界、看板を出した待合や。さ膝を崩いて、樂にござつて、尼かて此の年、男も同然、胡坐を搔いても人は沙汰せん。それに袴はいとるぞに。」

また高笑ひで、

「……其處で念のため云うておくのですが、内證話をあけすけなが、あんたも世間が解つておいでや。寸法とかいふもんで、此處へ來ての以上、一口、酒となれば、藝妓も呼んでやらう、それ、ちやんと其の了簡は見えてある。なれど、それはさせんぞ。今日だけは、此方へ萬事まかせてくんされ、別懇のお附合や。そのかはり、故と藝妓は呼ばん。尼がお對手して、姪がお酌やて、辛抱ものや。その辛抱次手にな、お肴もありあはせやぞに。惣菜さながらの。」

いよ／＼口を利かせません。立つにも立たれはしないから、少時腰を据ゑる覺悟をしました。が、何分にも、餞れた黄肌鮪鬚長鮪が可恐しい。

「菟藟。」

「こんにやく。」

口の裡でむぐ／＼言つたのが耳へ入つたか、聞返されて、驚いて、

「卵の花などが結構です。」

また、うつかり、下の縁側を卵の花が、葉を搦んだ白い脚が、寢衣の裳を曳いて寢みだれ姿で

寝床からと……その様子が、自分勝手の胸にあつた。たゞし、他家様のお惣菜を、豆腐、豆府、は失禮だ。

「たとへばです。」

「お好きか、なんぼなど、内で間に合ふ、言ひつけやうでに。さ、もう、用意はして居つたが、お燗の望みは熱いのか、ぬるいのか、何せい、程のい、處……もう出来たらうに、何しとるぞ。」

と、手をたたく。

「はい。」

返事は下でお極りの、それは小女か女中かで、銚子、盃、添へものは、襖が開いて、姪——間淵の娘の手で、もう卓子臺に並んだのでありました。

さて、お盃。なか／＼飲める。……柳町で惱まされた子子が酔ひさうなものではなかつた。

「お孝、お孝。」

と若いかみさんの、姪を呼んで、

「重ねて、それ、お酌をせんかの。……何をぼんやり……あなたの顔を見とるがや。……電燈もつけて。」

其の燈に、お孝が、……若いかみさんの飲まない顔が、何故か、耳元まで紅かつたのです。

「これがほんの水入らず、にい。然ういへば、お對手は、姪、尼でもや、酒だけは黒松の、それも生一本やで、何と、此の上の町、こゝでの名所、一本松というてもいゝやろ。」

と尼刀自が洒落れた。が、此の洒落は悪くない。

「あ、然うぢや……あなたの故郷にもおなじ名所があつたに——一本松——

……忘れもせんに、私が十三か四の頃や、洞齋兄さへ、まだ、尾山（金澤を云ふ。近國近郷の稱呼）の、あなたの家へ寄宿せぬさき、親どもに手を曳かれて、お城下の本願寺、お末寺へ参詣した時、橋の上からも、宿の二階からも、いゝ姿に、一目に見はらされて今でも忘れはせんのおぢやが、其の昔、あすこに心中があつたさうやに。」

「……聞いて居ます。」

「その心中に、くどき、くどきや、唄があつて、あはれなものやが、ご存じですやろ。」

「いや、いゝえ知りませんよ。」

私はまるつきり知らなかつた。

小山直横は、時に盃をあらためて、
「私は、まるで知らなかつた——同郷です、あなたは大方、ご存じでせう。」と云つた。

筆者も更に知らなかつた。

「些とも知りません。聞いたこともありません。」

「妙ですな、お國ものが誰も知らないで、隣りの能登の田舎の方で知つて居る。尤も、その時、間瀬の尼の話した處では、加賀の安宅の方から、きまつて、尼さんが二人づれ、毎年のやうに盃蘭盆の頃になると行脚をして来て、村里を流しながら唄つたので、ふしといひ、唄といひ、里人は皆涙をそゝられた。娘たちは、袖を絞つたために今も尙ほ、よくその説句を覚えて居ると、云つて聞かせました。心中の命は卯辰山に消えたが、はかない魂は浮名とともに、城下の町を憚つて、海づたひに波に流れたのかも知れません。——土地に縁のある事は、能登屋仁平、といふのです。いや、不義ゆゑの心中の、それは年とつた本夫で、其の若い女房と、對手が若年の侍です——」

——是非と望んで、これは私が聞きました。尼婆さんの他の饒舌には弱らされたが、これだけは、もう一度、また一度と、きかせて貰つた。調子に乗ると、手拍子が張扇子になつて、然も自己流の手ごしらへ。それでもお惣菜の卯の花だ、とお孝の言譯も憎くない。句切だけぐらうだけれども、娘の鼓の手が入つたのです。が説くぞ、説きます、といふ尼婆さんの口説節が、あはれに、うらがなしく、昔なつかしく、胸にしみて、ぞくぞく心を揺つて、その癖、一本松が、くわ

つと血を湧かして、火のやうに酔つて行く。

さんざ浮かれた折ばかり、酔ひしれるとは限りません。はかない、悲しい、或は床しい、上品な唄、踊、舞を見て、魂とともに、とろ／＼に酔つて行く。……あの體で。……あでやかな鬼の舞を視ながら、英雄が酔つぱらつた例もあります。いや、いつかの間瀬の話ぢやないが、蟻の細工までにも到らない、箸けつりの木彫屋が、餘五將軍をのみなかまに引込んだ處は、私も餘程酔ひました。——ま、ま、あなたへ、一杯。」

閑靜な席で、對坐に人ませぬ酒の中に、話が此處へ来たころは、其の杯を受けた筆者も酔が廻つた。此の筆者の私と、談者の私と、酔つた同士は、こんがらかつても、修理を捌くお手際は、謹んで、讀者の賢明に仰ぐのである。

七

雪

「何、唄をお聞きになる、よろしい、ヤツつけませう。節なしに……尤も、節をつけては大變だ。……繰返して、聞いたから、其處、此處うろぬきながら覚えて居ます。——戀とサア、といふくどきです。」

戀とサア情の其の二道は、やまと、唐土、夷の國の、おろしや、いぎりす、あめりか國

も、何處のいづくも、かはりはしない。さても今度の心中話。それをくはしくたづねて見れば、加賀の城下の其の片畔、能登屋仁平が、

これです、年とつた亭主といふのは。――

女房のおとせ、年は二十一愛嬌盛り……

一寸娘が氣になりますね。鼓をうつてる……年も丁ど其のくらゐ。

いつの頃から夫に忍び、其の名岩島友吉こそは、年も二十六、やさがた生れ、きりやう好いのについ誘かされて、人目忍びて逢ふ瀬の數も、……

――阿漕が浦の度かさなれば、おさだまりで、忽ち近所となりのうはさ、これも定まる處です。

夫仁平は穩厚な生れ、くわつと燃立つ胸なでおろし、それが素振は顔へも出さず……

い、か、悪いか、分りませんが、金澤ものだ、仕方がない、とに角杯を合せませう。で、何しろ、かやうに親類縁者までの耳へ入るやうになつては、世間へ濟まぬ。今はこれまで、暇をくれよう、どんな夫を持たうとも、然うなれば仔細はないと、穩厚人、出方がまことにおとなしい。……尤も、

そちが此家へ来たそのはじめ、わづか年さへ二七の春よ、思ひまはせば七年以來……

といふのです。二七の春――私は又……曳船で見た、お冬さんの其のころの年を思つた、十五

六――

いへばおとせは顔赤らめて、何もいはずに恥し姿。五年六年、年つき日ころ、かはい、かはいと、撫でさするまで、情わすれた不義いたづらを、ぶつか叩くか、しもせうことを、すいた男を添はせてやると、かゝる實意な夫をすてる、冥利すぎます、もつたいなさに、天の冥加も、いと可恐しい。せめて夫へ言譯のため、死んでおわびは草葉の蔭と、雨に出て行く夜空の涙……

それから屋敷町の暗夜へ忍んだ、勿論、小祿らしい。約束の礫を當てると、男が切戸から引込んで、すぐ膝に抱く、泣伏す場面で、

そなた一人をあの世へやるか、二人ならでは死なせはしない、何の浮世は唯假の宿、どうで一度は死なねばならぬ、死んで未來で添遂げようと、いへば嬉しや尙ほさら涙のさらば最期と豫ての用意、女肌には緋の帷巾に、上は單衣の藍紺縞よ、當世はやりの……

其の頃の派手らしい藍紺縞――これを最初に唄つた時、尼婆さんは、當世はやりの何とか、と高々とやりながら忘れて居た。ちやうど、お孝が銚子のかはりめに立つた時だつたのです。が、尼婆さんの首を捻る處へ上つて来て、

柳 雪
當世はやりの黒襦子の帯……

と言繼いだ。一寸々々唄ふらしい、尼婆さんの方で忘れた處を、き、覚えのお孝が續けたのですが、はて、……呉縞服綸ではなかつたか、と尼婆さんはもう一度考へましたが、

……黒縞子の帯、二重まではして、すらりと結び、髪は島田の笄長く、そこで男の衣裳と見れば、下に白地の能登おり縮、上は紋つき薄色一重、のぞき淺黄のぶツ裂羽織、胸は覺悟の打紐ぞとよ、しやんと袴の股立とりて……大小すつきり落しにさして……

——飛んでもない、いや、申戯ぢやない、何がしやんと、股立です。のぞき淺黄のぶツ裂羽織が事をかしい。熱くて脱いだ黒無地のべんべら縮が疊んであつた、それなり懷中へ捻込んだ、大小すつきり落しにさすと云ふのが、洋杖、洋杖です。あいつを左腰から帯へ突出してぶら下げた形といつては——千駄木の大師匠に十幾年、年期を入れた、自分免許の木彫の手練でも、洋杖は刀になりません。竹篋にも杓子にもならない。蟻にはもとより、燕にならず、大根にならず、人參にならず、黒いから、大まけにまけた處が牛蒡です。即ち、牛蒡丸拔安の細身の一刀、これをぶら下げた圖といふものは、尻尾ぢやないが、十番越に狸穴から狸に化かされた同様な形です。

あゝ、しかし、恚ういつても——不思議ともいふべき、めぐり合せで、その時、一つ傘で連立つて居た——お冬さんをおなじ化され夥間だと思はれては情ない。申譯がないのです。酔つて居ます。だしぬけにこんな事をいつて、確に酔つて居る。私は息が忙込みますが、あな

たは何うぞ静にお聞き下さい……」

——一寸呆氣に取られたが、この言葉で、筆者は静に聞いて居た。

「話は前後しました、が、この既にお冬さんの一つ傘に肩を並べた時は、何だか、それなり一本松へ心中に出掛けるやうな氣がしたんですから——この面や格好を見ては不可ません。」

直槓は寂しく笑つた。

「まあ、しかし忘れぬうちに、唄のあとを續けてからにしませう。——大小すらりと落しにさして、——といふ處で、前後しました……」

こゝで死んでは憚る人目。死出の山邊に燈一つ見える、一つ灯にたゞ松一つ、一本松こそ場所屈竟と、頃は五月の日も十四日、月はあれども心の闇に、迷ふ手と手の相合傘よ、すぐに柄もりに袖絞るらむ。心細道岩坂辿り、辿りついたは其の松の蔭。かげの夫婦は手で抱合うて、かくす死恥旗天蓋と、蛇目傘開いて肩身をすぼめ、おとせ、あれ／＼草葉の露に、青い幽な螢火一つ、二つないのは心にかゝる。されど露には影さすものを、わたしや影でも厭ひはせぬと、継るおとせを又抱きしめて、女房過分な、かうなる身にも、露の影とは、そなたの卑下よ、消ゆるわれらに永劫未來、たつた一つの光はそなた。さらば最期ぞ、覺悟はよいか、いへばおとせは顔ふりあげて、なんの今さら未練があら

う、早う早うと兩掌を合はす、松もかつ散る氷の刃……

つらく思ふに、心中なぞするもんぢやありません、後世には酒の肴になる。いや怪しからない、いつまで聞いて居ようといふんだ。私は心で叱りました。」

「——ありがたう……厚くお禮を申上げる……唄と、馳走のお厚情、かさねて、ご挨拶を。これで、失禮——心なく、思はず長座をいたしました。何だか歸途に一本松が見たくなりました。」と、機に起つと、

「わけないぞに、一緒に行かうかに。」

慄慄とした、玉露を望んで、中氣藥を舐めさせられた。その厭な心持。酔も醒めたといふうちにも、エイと掛聲で、上框に腰を落して、直してあつた下駄を突っかける時、

「あ、月が出た。」

と壁の胡瓜を見たんですから、ちらつくどころか、目も磨硝子で、ゆがんで居た。

處へ、ざつと雨が來ました。土間の鉢植が、土と一所に濕つぽく濡々と香ふ。

「お孝や、い、んだよ。私がお送り申すから。」

すぐ傍で——いま、つい近い自動車まで、と傘を手にして三和土へ出た娘を留めて——優しい聲がすると、酒の勢で素早く格子戸を出た、そのすぐ傍です。切戸が一枚、片暗がりにツイと開

く。鉢植でもあらうと思ふ、細い柳の雨に搦んで、細い青々とした、黒塀へ、雪が浮いたやうに出たんです。袖に添へた紺蛇目傘がさつと涼しい、ろくろの音で、

「さあ、どうぞ。」

一かげり翳つた下へ、私は頭は光らないが、小さな螢のやうにもう吸込まれた。送つて出たお孝が紛れ込むやうに、降り来る雨に、一騒ぎ。そこらがざわめく人の足音、潮時の往來の影。その賑な明るい燈の町へ向はずに、黒塀添ひを傘で導く。

死出の山邊の灯一つ見える、一つ灯に松たざ一つ、一本松こそ、場所屈竟と、頃は五月の日も十四日、月はあれども心の闇に、迷ふ手と手の相合傘よ、すぐに柄もりの袖絞る

らむ……

被布の抜衣紋で、ぐたりと成つた、尼婆さんの形が、散らかつた杯盤の中に目に見えるやうで、

……二階でまだ唄つて居る。

「お危うございますよ、敷石に高低がありますから。」

「つん踏つても構やしません。」

「あんなこと。」

「さうすれば、お継り申す。」

「おほ。」

「しかし、いゝんですか。……失禮ですが、お冬さん……ですね。」

横顔で莞爾したやうで、唇が動いたが、其のまゝ艶々とした圓髻の、手柄の淺黄を薄く、すんなりとした頸脚で、うつむいたのがうなづいた返事らしい。

「……眞個にいゝんですか、病氣だつていふぢやありませんか。」

「ぶら／＼しては居ましたけれど、よもや、こんな處へなぞおいでなさりはしなからうと思つて居りましたのに、眞實嬉しうございますわ。」

「私も嬉しいんです。」

何だか聲が掠れて居る。

「まあ、お世辭のいゝこと。でも、いま、名をおつしやられて震へましたよ。迎も覚えてなぞお在なさらないと存じました。けれど、それでもお目にかゝりますのに、餘り取亂して居たもんで、すから、急にあの髮結さんと呼んで、それから湯へ入つたりなんかして……ついお座敷へ伺ひますのが。」

夜目にも湯上りの薄化粧と、見れば一層鬢が濡れて、ほんのりした耳元の清らかさ。それに人肌といひますか、なつかしい香が、傘を打つしと／＼雨に、音もなく揺れるんです。

「卵の花。」

慌てて、言ひそらして、

「曳船を、柳町を思ひ出します。」

「ねえ、お久しい……二十……何年ぶりですか。私は口不重寶で、口に出しては何にもいへはいたしません。」

「何をです。」

「いゝえ、いゝんです。」

「おつしやい、云つて下さい、さうでないと、狸になつて、あなたの傘を持った手に、もじや、もじや。」

「あれ。」

「觸りやしない。觸りやしないが、ぶら下りかねないといふんです。いつて下さいよ。」

「たゞね、あつかましいんですけど、片時も忘れはしませんと申す事。」

「ご同然……」

「……」

「以上です。」

「……」
「お冬さん」

「口をおき、なさらなければ毛だらけの手が。」

「それこそ、狸ちゃんであらうしやる。」

「え、狸。」

「私をおだまします。」

「はぐらかしちや不可ないなあ、時に、路地を出ましたね。」

下駄がしとつて、燈が流れる。

「構ひませんか、こんな事をして歩行いて居て。」

「里うちですもの、お互に廊下で行逢ふもおなじですわ。」

私は酒の胸がわくわくした。

「處で、自動車の、あります處は。」

「手前どもの、つい傍だつたんでございますけれど、少し廻道をしたんですよ。大それた……お連れ申して歩行いて済みません。もう直き其處にございますから。」

「そりや、そりや困る、直き其處ぢや困るんだ。是非大廻りに、堂々めぐり、五百羅漢、卍巴に廻つて下さい。唐天竺か、いや違つた、やまと、もろこしですか、いきりす、あめりかか、そんな、まだるつこしいことはおいて、お願いです、二の橋か、一本松へ連れてつて頂きたい。」

「行らつしやる。」

お冬は軽く佇みました。

「ほんたうに。」

「勿論、一緒に行つて下さるんなら。ご迷惑？」

「い、え、嬉しいんです。でも、まだお目にかゝりませんけれど、奥様にお悪くはないでせうか。」
「名所古跡を尋ねるのは、堂寺まわり同然です、構やしない。後生のためです、順禮に報謝のつもりで——あ、さうだ龜井戸だ。——お酌といふのが贅澤なら、あなたの手から煙草をのまないぢや歸らない、一層お宅へ引返すか。」

「それは、でもあの尼が、あなたのお座敷へ出ますの喜びませんやうな様子が見えます。」

これは然うらしい。でなくつても、あの顔は見たくない。又いかに何でも、ほかの待合なぞへとは言ひかねました。尤もそのまゝ別れる氣はない。處へ自動車が見つかった。

柳 雪
弱つた。一應は聲をかけなければ濟まない。

「あ、柳町へ来ましたね。」

「丁ど人丈三つばかりなのが、雨に青い蓑で立つて居て、その傍に空地を控へ、おでん屋が出て居ました。」

「又おもひ出します、難有い。」

傘の中から面と肩を斜つかひに、つゝかゝるやうに暖簾の中へ突出して、

「や、お閻魔殿、ご機嫌よう。」

「一口にアぶり、えへッ、へッへッ、頭から鹽といふ處を……味噌にしますか。」

「味噌は、あやまる。からしにしてくれ、菘蕪だ。」

「掛聲はありがたいが閻魔はひどろがす。旦那、辻の地藏といはれます、石で刻んで、重味があつても、のつぺりと柔い。」

「なるほど。」

「はん。へんのやうな男で。」

「はん。へんは不可い、菘蕪だ。からしを。」

「ご酒は……酒はそれこそ、黒松の生一本です。」

「私は、何だつたつて、一本松だよ。」

傘に葉すれの音がします。うしろから柳の寝寝子を着せ掛けられるやうな気がして振向くと、一つに包まつたほど、小雨もほの暖く湯上りの白い膚が、單衣を透通るばかり、立つて居る。

「お、こりや、雪の家の、ご新姐。」

待合の女房を、ご新姐といふ。娘のおかみさんがあるのに對してだ、と思はれた。

あとで解つた事です。――

お冬は武家の出で、本所に落魄れた旗本か、ごけにんの血を引いて居る。煮豆屋の婆が口を利いて、築地邊の大會社の社長が、事務繁雜の氣保養に、曳船の假の一人すみ、ほんの當座の手傳ひと、頼まれた。手廻り調度は、隅田川を、やがて、大船で四五日の中に裏木戸へ積込むといふので、間に合せの小鍋、碗家具、古脇息の類まで、當座お冬の家から持運んで居た、といひます。その折に、雲原明流先生の内弟子、けづり小僧が訪ねたのです。それこそ、徳川の末の末の細流は、淀みつ、濁りつ、消えつつも、風説は二の橋あたりへまで傳はり流れて、土地のおでん屋の耳から口へ、ご新姐であつたとも思はれる。

次手に、

柳 雪
――曳船の時、お十九でいらつしやいましたね、そのあんたの前で、間淵洞齋が頼杖をつきなから、十五の私を、おれの女房だと、申しました。それツ切、私は世の中を斷念めました――

肌身は、茶碗の水と一緒に、その夜、卯の花のやうに、こなくに散つた、と言ふのを、やがて聞くことになりました。

それも、これも、私が魅されたのかも知れない。間滞に、例の「魔道傳書」がありません。女房に相傳して居ないと言はれますか——お聞きになれば分るんですが。

「何を差上げます。ご新姐さん。」

うしろの空地に、つめ襟の服と、印半纏、人影が二つ三つさして來た。

「私は。……」

「しばらく、お見かけ申しません。」

「ご病氣だつた。それだもの、湯ざめをなさると不可い。猪口でなんぞ、硝子盃だ、硝子盃。しかし、一口いかにです。」

「では。故と一つだけ。」

で、硝子盃から猪口へ通はせる。何を通はせるんだか、さながら手品の前藝です。酔方をお察し下さい。

「ご勘定、いゝんですよ。」

「よくはありません。」

「私におまかせなさいまし。」

「實はおまかせ申したいんです。溝へ打棄らないで、一本松へ。」

「はあ、それはご趣向。あとで、お駕籠でお迎ひに参りませう。」

「棺桶といへ、お閻魔殿。——ご馳走でした。……お冬さん、其處で、一本松までは遙々ですか。」

「え、え、遙々……こゝから小石川柳町もつと、本所ほどもありませんか、ほ、——そ

この(ざぶしき)から直ぐですわ。」

「そいつは、心中を済ましたあとです。」

「まあ、(ざぶしき)といふ町の名。」

「これは失禮。」

と、明い町に、お辭儀をして、あの板の並んだ道を、船に乗つたやうに踰越した。酔つて居ます。

「交番がありますから、裏路地を。」

「的實、ご尤です。」

「ね、暗うございますから、お氣をつけなさいましよ。」

「お、冷い。……おん手を給はる、……しかし冷いお手だ。」

「濟みません。冬も寒の中、指は霜の柱ですわ、こんな身體で。……」
「飛んでもない、私から見ると(二十一)だ。何でしたつけ、何だつけ……(年紀は二十一愛嬌盛り)……」

「あれ、危い、路が悪いですから。そんなに分離なすつては濡れますよ。」

「心得た、(しやんと袴の股立とりて。大小すらりと落しにさして)……」

「……です。濡れに寄るにも、袖によるにも、洋杖は溢出しますから、件の牛蒡丸拔安です。それ、ばかされて居ませう。ばかされながらも其の頃までは、まだ前後を忘却して居なかつた筈ですが、路地を出ると、すぐ近く、高い石磴が、くらがり灰白。深々とした夜氣に包まれて階子のやうに見えるのが、——ご存じと思ひます。——故郷の一本松の上り口にそっくりです。段の数はあるが、一も二もなく踏掛けた。

あたりに人ツ子一人なし、雨はしきる、相合傘で。

「——いよく道行です、何でしたつけ……」

さらば最期のかねての覺悟。

女肌には緋のかたびらに、上は單衣の藍紺縞よ……

でしたかね。」

といふ時、ふと見ると、おでん屋の燈でも、町通りでも氣がつかなかつた。暗夜の幻影、麻布銀座のあたりがさすか、其の藍と紺の横縞の、お召……ですか、その單衣に、縞子ではないでせうが、黒の織物に、さつきの柳の葉が絡つたやうな織出しの優しい帯をしめて居る。

——生靈か、死靈か、こゝで其の姿が消えるのではないかと、聞いて居る筆者は思つた。さきに「近世怪談録」を見て居るほどだから、其の浅草新堀の西福寺うらの若侍とおなじく、横路地で冷たい手、といつた時、もう片手きかないほどに氷つたのではないか、と危んだくらるであつた。

「……やさしい、すゞしい帯でした。」

女肌には緋のかたびらに……

が、それが、なよ／＼とした白縮緬、青味がかつた水浅黄の蹴出しが見える、緋鹿子で年が少いと——お七の處、磴が急で、ちらりと搦むのが、目につくと、踵をくびつた白足袋で、庭下駄を穿いて居ました。」

雪
柳
——筆者は爾時、二人の酒席の艶かな卓子臺の上に、水浅黄の棲を雪なす足袋に掛けて、片裾庭下駄を揚げた姿を見、且つ傘の雫の杯洗にこぼる、音を聞いた。熟と、ともに天井を仰いだ直槓は、其の丸髻の白い顔に、鮮麗な眉を、面影に見たらしい。——熟と、少時して、まうつむけ

のやうに俯向いた。酔つて居る。

「や、あなたは庭下駄を穿いて居ますね。」

吃驚して私が云つた。

「いつそ脱ぎませうか。」

「跣足になる……」

「え、。」

「覺悟はいゝんですか。」

「本望ですわ。」

「一本松へ着いてから。」

「え、一本松へついてから。」

「一緒に草葉の螢を見ませう。」

「是非どうぞ。」

「其處までは脱がせません、玉散る双を抜く時に。」

が、例の牛蒡丸の洋杖で、そいつを捻くつた處は、いよく以て魅まれものです。

——さて、その一本松です。夜目に見て、前申した故郷の松に其のまゝです。一體、名所の松といへば、それが二本松、三本松でも、實際また繪で見なくても、いゝ姿はわかるものです、暗夜の遠燈の、ほの影に、それに露をかけた小雨なんです。

——あゝ、まだ彼處をごらんにならない。——實は私も其の夜がはじめてで。

事情あつて、其の後、あの一本松、また寺の石磴のあたりまでは参りましたけれども、石磴を上つたつて松も何もありません。磴は横です。眞向うに、其の夜、眞暗な上り道がありました。一本松はその上なんです。石磴は、のぼると、……寺なのを、まつたく其の時は知らなかつた。のみならず、お目にかけたいくらる、あの石磴は妙です。あたりに何にもない中に立つて居るから、灰白い空の階子のやうで、故郷の山道に似た處から、ひとりぎめに、私が先へ踏掛けだ。ついて上つたのは、お冬さんなんです、何うでせう。庭下駄で捌く袂の媚かきさが、一段、一段、肩にも、腰にも、裳にも添つて、上り切ると、一本松が見えたから不思議なんです。

「風はないのに、松の匂が襲ふと一緒に、弱い女の肌の香が消えさうで。……實際身でしめ、袖で抱きたかつた。」

かげの夫婦は手で抱合うて……

それから何でしたつけ。

お冬が、

「……かくす死恥……ですわ、そんな、唄、うたつてかまひませんか。

かくす死恥旗天蓋に、蛇目傘開いて肩身をすぼめ……

あれ、お燈明が、石燈籠に。

おとせあれ見よ、草葉の露に、青い幽迷な螢火一つ……

螢のやうですわね。

「お燈明。」

「え、ねえ、ごらんさい、此の松には女の乳を供へるんです。」

「飛んでもない、あなたの乳なぞ。……妬ける、妬けます。」

と云つた。……乳とたゞ言はれただけで、お冬さんの胸が雪白に見えるほど、私の目が、い、

え、お冬さんのいふ言葉が、乳にかぎらず、草といへば、草、葉といへば、葉、露は、露、螢は、

螢、燈明が燈明に見えたんです。何よりも一本松が一本松に、ありくと夜中に見えたんですか

ら化されて居たに違ひない。いやそれ以上、魔法にやられて居たのです、——「傳書」をお忘れに

なりますまい。處で、唄の忘れた處は、その胸に手をあてて、お冬さんが思ひ出しては、つけて

うたつて、聞かせました。

「あの、……(わたしや蔭でもいとひはせぬと、縋るおとせ)……何ですか、もんくでも私の口か

らだとあつかましい。」

「それは此方でいふ事ですが、何でしたつけな……縋るおとせを又抱きしめて……

……縋るおとせを又抱きしめて、女房過分な、かうなる身にも、露の影とは女の卑下よ、

消ゆるわが身に永劫未來、たつた一つの光はそなた。

あ、お燈明が、螢が消えた。

手を取りました。

「私も消えたうございますわ。」といふのです。

——(同好の怪談は、こゝでお冬さんが幽霊になつて消えるのか、と筆者は又思つた、が、然

うではなかつた。)

「私も消えたうございますわ。」

と、お冬さんがいつた時です。松をしぶいて、ざつと大降りに成つた。單衣の藍、帯の柳、う

す青い褌、白い足袋まで、雨明りといふのに、濡々と鮮明した。

柳 雪

「傘では凌げません、雨宿りに、此の中へ消えませう。」

と、其の姿で……こゝは暗闇だ。お聞きになるあなたの目に、もう一度故郷の一本松を思ひ浮べて頂きたい。あの松の幹をです。立上りはしないで、傘なりに少し屈腰になつて、其の白い手で、トンと敲いたと思ふと、蘭燈といひますか、かさなり咲いた芍薬の花に、電燈を包んだやうな光明がさして、金欄の衾、錦の褥、珊瑚の枕、瑠璃の床、瑪瑙の柱、螺鈿の衣桁が燎爛と輝いた。

覺悟をしました。慥に傳來の魔法にかゝつた。下司と、鈍痴と、劣情を兼ね備へた奴として、此の魔法にかゝらずに居られますか。

その上に大醉惱亂です。——一度はいつか、二日酔の朝、胸が上下に跳上り動悸をうつと、仰向けに寝て居て、茶の間の、めくり曆の赤い處が血を噴いた女の切首になつて飛上り飛下りしたのを忘れない。それにもました惑亂です。

のめり込んで、錦爛の裡にぼかんとすると、

「一口、めしあがりますか。」

「何の事です、それぢや狒々の老耄か、仙人の化物になる。」

と言つたんだから可恐しい。

狸穴の狸ぢやないが、一本松の幹の中へ入つた氣で居て、それに供へるといふ處から、入りしなに塚に詰めた白いのを、鼻頭で搔分けたつもりで居る。それが朦朧として、何だかお冬さんの懷の中へ、つまみ込まれたやうだつたものですから。……何にしろ魔法にかゝつた、いよゝゝ魔法に掛つたに相違ない。一口、といふのさへ酒でなしに。魔法に限ります、かゝり切りになつて居りや申分はありません。」

といつて、肩のめりに、ぐつたりと手を支いた。

この獅子屋さん、名も直槓が、くなくに成つたから、餘程をかしい。

いや、話は可笑しいのではないのである。

「御加護、たまはれ。」

柳 雪
——さて、かくて、曳船の卯の花の時、後に柳町の折とては、着て肌を蔽ふほどのものもなかつた、肌襦袢とあれだけでは、襖から透見も出来なかつたことなど聞き、聞き……地藏菩薩の白い豆腐は布ばかり、澁黒い菟藪は、てゝらにして、淨玻璃に映り、閻魔大王の前に領伏した

やうな気がして、豆腐は、ふつくり、蕨蕨は、痩せたり。二個の亡者は、奈落へ落込んだ覺悟で居る。それも良心の苛責ゆゑでありませうのに、あたりの七寶莊嚴なのは、どうも變だ、といよいよ魔法にかゝつて、とろ／＼としたと思ふ。

「御加護たまはれ。」

かゝる場所にて呼び奉るを、許させらるゝやう、氏神を念じて起上つた私は、薄搔卷を取つて、引被せて、お冬さんを包んだのです。おさへた袖がわな／＼と震へるのは、どうも踊るやうな自分の手で。——覺悟をすると、婦は耳も白澄むばかり、髪も、櫛も、中指も、しんとするほど静です。

「誰だ！」

どころぢやない。大きな天井に届く老婆の顔が、のし掛つて、屏風越に、薄髭の頤でのぞいて居る……其の凄さといふものは。

尤も、うと／＼とするうちに、もそり／＼裙で動いたものがある。鼠、いや、猫より大きい。然も赤ツちやけたものが、何か動く。紅いものといつては、お冬さんはちらりともつけて居なかつた。第一、身づくろひをするに於ては、腰を上げ手を伸ばし、餘りに人品が悪過ぎる。夢か、

犬かと、思つたのが薄汚れた、赤袴です。赤袴の這身で忍んで、豫め、お冬さんの衣桁にも掛かず嗜んで置いた、帯を掴み出して居たのです。それを、柳に濡色な艶々と黒いのを、みしと踏んで、突立つたのが、あと足で蹴退けると齊しく、

「誰だ、何が、誰だとは人間に向うてよういうた、にい。畜生のくせにして。おのれ。」

と其の袴で、のし／＼と出て坐つた。黒の被布で、鈍色の單衣の白襟で、窪んだ目を睨いた。

「お、見た處が、まだ面相は人間ぢやに、手は、足は、指なぞ何うぞに、もう犬猫の毛が生えてはせぬか。どれ、掌など、一寸見せやれ。に、どれ、どれ。」

私は引拂つて手を引いた。幻に見えるのは、例の黒い瓶の煉薬です。——その向つた柱には、どんな姿が、どんなありさまになつて居たとお思ひになります、これにかゝつては堪らない。汚らばしい。

「何をするんだ。觸つちや不可い。」

「觸つたら嬉しかろ、難有いとおもひなされ、そりや犬猫に、お手々といふ處ぢやがや。」

「犬猫、畜生とは何だ。口が過ぎよう。——間淵の妹。」

柳 雪
「うん、小山彌作——何で尼の口が過ぎる。畜生、というたが悪いと思ふか。くろよ、くろよ、ぶちよ、ぶちよ、うふ、うふ、うふ。」

と、いやらしく口を割つて、黄色い齒で笑つたあとを一睨み睨んだ。目が光つて、

「この牡。」

「牡。」

餘りの事に、私はむきと居直つた。

「牡、牡よ。そつちの牝も鬚の鬢が、頬先に渦毛を巻いとる、見しやれ。人間の言葉が通ずるうちに、よう聞け、よう聞けや。」

牝が傘さいて、此の牡を送つて出たまではよかつたれどな、歸りが遅い。その遅いだけでさへもちや、お孝がどないにも氣を揉んだいのう。起つたり居たり、門へ出る、路地を覗く。何をそはつくやら、尼も希有なと思つとるうちに、おでん屋で聞いたさうな、一本松の方へ、この雨の降る中、うせたとな。

お孝が早や、あはれや、見得も外聞もない。裙をくるりと、あの坂を走り上つた。うれしやな、あゝさん、と駆けよつたのが、あの、ほの白い松の根の建札や、とにい、建札が顔に見えるやうやつたら、曝首ぢやが、そらほどの罪……を、また犯いたぞ。」

其の松の中へ、白鷺と梟が峙した夢は、こゝではつきり覺めました。七寶の粧も螺鈿の衣桁も忽ち消えて、紗綾、縮緬も、葉、枯枝、古綿や桃色の褪せた襪の巢となつたんです。

「豫てから私も知つとる、お孝はなお孝はな、……それがために、牝、われが身になつて、食ひものねだりの無理非道よりも泣かされたぞ、に、に。牝、牝も骨身……肩、腰、胸、腹、柔い臆まで響いてこたへて居らうに。洞齋兄がや、足腰の立たん中氣の病人がや、四年越、間がな、際がな、牝の姿が立違つて、一寸の間見えぬでも、嚙みついて、咽笛を壓伏せるやうにや、氣精を揉んだは何のためや、お冬おのれが、こゝな、この、木彫師、直槓。」

私は呼吸を詰めた。

「小山さんぢや。まだ其の時は牡、とはいふまい。また牝、ともいふまい。其の時には、金輪際みだら、ふしだらはなかつた。また有るわけもないかぢや事は、尼も、洞齋兄の身にかはつて天地を見抜いてよう知つとる。ぢやが、病人は、たゞ其のみを、末期まで、嫉妬に嫉妬して、われの貞操を責め抜いたに、お冬も泣かされれば、尼かて、われの身になつて見て、いとしうてならなんだ。」

うゝ、因果やの、前世の業といふは可恐しい。曳船でも、柳町でも、此の直槓の形が家の内へ顯はれると、棟、柱、梁に崇られた同然に、洞齋兄は影を消すやうに引越して、あとをくらまかいた、二十何年もたつて、臨終にも、目を瞑らず、二世三世までも苦しんだ。嫉妬、怨念、その業因があればこそ、何の、中氣やかて見事に治療をして見せる親身の妹——尼の示現の灸も、其

の效がなかつたといふもんやぞ、に。」

黒い瓶、いや其の信玄袋を、ひしと擱んで、

「に、それやもんの、あだ果報な、牡めは、宿業として、それだけお冬に思はれて居つた、自から夫の病人に其の氣が通ずる、に、に。それやよつてぢや、相合傘で送つて出て、一本松にも居らぬとすりや、雨の中を、いつまでも、何處へ何う行くもんや、つもつても知れてをる。……知れるよつてに、お孝が半狂亂ぢや、松の邊には居らぬと見て、駈けづり歩行いて、捜しまはつた、脛の泥の、はねだらけで、や、お佛壇の前に、寝しなのお勤行をしてをつた尼の膝に抱きついた。これがや、はや、に、小猫が身を揉むやうに、

——助けて下さい、お嬢さん——

と、いゝか、

——私は畜生になります——

とぢやに。」

たゞ引伏せた練絹に似た、死んだやうなお冬の姿が、撓ふばかりに揺れたのであります。

「私も、わけをきいて、う、五寸の焼釘を、こゝの肝へ刺されたぞ。——畜生になります——とお孝がいうた一言ぢや。」

「何うしたんです。お孝さんが何をいつたんだ。」

「言ふか、言はうか。」

「え、可厭な息を掛けるない、何だ。」

「聞くか、聞くか。また、聞かさいで、おかれうか。おのれら二人は、いゝ事にして、もと友だちの、うつくしい女房、たかが待合の阿媽。やかれても、あぶられても、今は後家や、天不晴れ察度はあるまいみだらぢやが、神佛、天道、第一尼らが弘法様がお許しなないぞ。これ、牡。」

「お黙んなさいよ。」

「うんや黙らん、牡、いや、これ小山直禎どの。あんたは過ぎた——何の年、何の月、何の日の、雨の降る夜に、友だちと三人づれ、赤坂の……何の待合で……酔倒れて……一夜あかいた……覚えがあるでしよ……でしよ……でしよ……その時の……若い藝妓を……誰やと思ふ。」
(拳を握つて、ハタと卓子臺について、がつくり額を落したから、聞いて居る筆者は驚いた。)

「あゝ。」

「もう其の聲が畜生の呻唸ぢや、どうぢや、牡、何と思ふ。牝、どうや。」

と、尼婆がじり〜と枕へ話寄せる。袴の赤いのが、お冬さんの細首を裂く血に見える。

柳 雪
「これ、夫の妹、おつかはしめの尼に對して、其の形は何ぢやい、手をつけ、踞め、起きされ、

起きされ、これ。」

「はい。」

といつて、前髪を枕にうつむいた。

「起きぬか。這へ。これ、やつと片手をついた處は、片膝ももたげたぢやろ、に。左か、右か、毛縮緬などからめかいて、いやらしい、犬がしいこくとおなじぢやぞに、に、に。」

くわつと成つた、私は子供のうちから手にする鑿小刀は、今ぞ、此の時のためではないか。畜生、いや、これは怪我にも口にすべきではない。飛びかゝつて、と思つて、又悚然としました。

お冬も、ぶる／＼と震へたんです。

「身を震はすの、身ぶるひするの、毛並を拂ふの、雨のあとのや。」

「姨さん、殺して……殺して……」

「何、殺せぢや、あは、は、贅澤な。これ、犬ころしにはならぬぞ、弘法様のおつかはしめは。」
私はぐうたらな癖に、くわつとなる、發作的短氣がある。

「お冬さん、死なう。」

「……嬉しい。」

「たゞし、婆を打殺して。」

「あれ、あなた、私だけ、私は覺悟をして居ます。」

「よい、よい、よい、よい。死ぬ、死なう。殺すとやに、其處まで覺悟がついたれば、氣を落ちつけて聞きんされ。や、や、二人とも、よう聞きんされ。これまでは罰や、罪業に對する一應の訓戒ぢや。そこを助ける、生きながら畜生道に落ちる處を救ひたまはる。現當利益、罰利生、弘法様はあらたかやぞ。」

おつかはしめの尼がや、示現の灸で助けてあげる。……

形ある、形ない、形ある病疾、形ない悪業、罪障、それを滅する此の灸の功力ぞに。よつて、祕法やぞに。此の法は、業病難病、なみ／＼ならぬ病とも又違うて……大切な術ゆゑに、裝束をあらためて、はじめから其の氣で來たや。さ、どうや。お冬さん……もう牝牝はいはんど。お冬さん、あんたも知つてぢやろ、別しての祕法は、艾も青々となる瑠璃の白露のやうながや。」

「助けて下さいまし、お尼さん、さうして、お灸は、何處へ。」

「魂は、胸三寸といふわいの。」

「え、。」

「鳩尾や、乳の間や。」

「……恥しい。」

「年でもあるまい。二十越した娘を育てたものが、何、恥しい。何、殿方に、は、こりや好いた人には娘のやうぢや。」

「夜もふけました、何事も明日にしては如何です。」

「滅相な、片時を争ふ。一寸のびても三寸の毛が生えようぞに。既に、一言を聞いた時、お孝には、もう施した。二人のためには手間は取られず、行方は知れぬ。こんな場席を、佛智力、法力を以て尋ねるのは勿體ない。よつて、魔魅や、魔魅の目と導きで探つて来たぞに、早う、なされんかに、お冬さん。」

「はい。」

「さ、お冬さん。」

「はい。」

「これ。」

「はい、でも。」

「え、うじくして、畜生。」

「……お尼さん、助けて下さい。」

「それ、見され。」

黒い皺手で、雪の胸。……

「お、軽々と柔かう、畜生になる處を、はや、ひつくり返つた。」

がばと開けて、

「それ、救の手が届くと、はや、白い天人が仰向いたやうぢや。え、邪魔な。」

細い、霜を立てたやうに、お冬が胸に合せた兩掌を、絹を裂くばかり肩ぐるみ、つかみ伸しに左右へ割いた。

「熱くない、知つての通り、熱くない、そのかはり少し大いぞ。」

艾ですが、縦に二筋、數六つ。およそ一千疋の子を孕んだ蜘蛛の蝨くやうに、それが尼の手につれて、一つ、青い動悸で、足を張つて動く。……八つの乳となりはしないか、私は肩から氷をあびた。

「やの、した、かな冷汗や、胸へ走るの、流れるの。熱うはない。」

と吐いて、附木を持翳すと、火入の埋火を、口が燃えるやうに吹いて、緑青の炎をつけた、芬と、硫黄の臭がした時です。

柳 雪

「南無普賢大菩薩、文珠師利。……仕ふる獅子も象も獸だ。灸は留め了へ、お冬さん。畜生にならう、お互に。」

「お、象よかろ、よかろ。手では短い、その、くにやくとした脚を片股もぎとつて、美婦がつた鼻へくツつけされ、嘸よかろ。」

「あ、あ。」

「その象結構だ、構ふものか。」

「……いやです、あなたが獅子でも、象でも、私は女で、影にも添つて居たいんです。」

「……こんな、いとしい思ひをした覚えはない。」

「よし。」

私は大胡坐で胸を開けた。

「尼さん、療治をうけよう。」

「火は熱いか、熱くないか、とおつしやるんですか。いや、それは……」

何だといつて、六つづ、十二の煙が、群りまとひ這ひまつはる、附木の硫黄は、火の車で、鐵の鍋の中に、豆腐と茸蕨がぐらくと煮える……申しますまい。口で言ふだけでも、お冬さんを、我が手で苛め虐げるに齊しいんですから。たゞ幻に見て、爪の尖まで、青くなつた時に、お冬さんが一言幽にいひました。

「草葉の、露に、青い、螢が、見えますわ。」

と手術でもうけたあとのやうに、漸と立つて、それでも、だてじめの上へ帯を抱へたなりに、膝をなやして、戸を出る私の背に縋つて、送らうとするのを、

「慎しみませい、灸の忌ぢや、男の傍へ寄つてもならん。」

と、袴をはだけて、立ちふさがつて突きつけた。

其處で、戸を膝行つて出た私ですが、ふらくと外へ出たのは一枚の開戸口で。——これが開いたのを、さきには一本松の幹だと思つた。見ると、小さな露臺があつて、瀬戸の大鉢に松が植つて居ます。一本松ではありません、何とかいふ待合、同業の家だつた。目の下が、軒並の棟を貫いて、此の家の三階へ、切立てのやうに掛けた、非常口の木の階段だつたのが分りました。いづれ、客の好奇心を喉らうと云つた誂へと見えます。確に寺の磴へ上ると思つて、何時の間にか——これで庭下駄で昇つた女に手を曳かれたのでは、霧に乗つた以上でせう。

すり落ちる下界は、自動車が（こゝへは通る）待つて居ました。傍に、家業から餘程奇を好んだと見えて、棕櫚の樹が鉢に突立てである、その葉が獅子の頭毛のやうに見えて、私は、もう一度ぐらくと目が眩んだ、横雲黒く、有明に……

柳 雪
あけがた家に歸つてから、私は二月ばかり煩つた。あとで、一本松、石磴の寺、その邊までは密と参りました。木戸をも閉めよ、貫木をも鎖せ、掛矢で飛込んでも逢ひたい。心に焼くやうに、

雪の家の空あたりが、血走る目で火の手になり、赤いまでに見えるけれども、炎を水にし氷にしても、お孝といふ、赤坂で一度間違ひをした娘に顔が合はされませぬ。

畜生でも構はない、逢へさへすれば……

心を削り、魂を切つて、雌雄の——はじめは人の面のを、と思ひました。女の方は黒髪を亂した、思ひ切つて美しい白い相の、野郎の方は南瓜に向顔巻でも構はない。が、そんな異相な木彫とすると、何處の宮堂でも引取りませぬ。全身の獅子を刻んで、一本松——あの附近の神社へ納めたんです。

名家の馬が草を食ひに、夜、抜出たのではない。牝獅子の方が、どうした事か、間もなく石磴を飛んで裂けました。」

直横はこゝで目を閉ぢた、が、はら／＼と落涙した。

「……丁ど其の頃だと言ひます。人にはいへず、打明けては頼めない事ですから、そこいら差觸りなく、おでん屋などに幅の利きさうな若い男を頼んで、あのあたりの様子を聞くと、雪の家のごしんぞは、気が狂つたらう、乳のまはり、胸に、六ところ、剃り落しても剃り落しても赤斑の毛が生える、浅間しさ、情なさに取詰めた、最後は、蟹女の繪が抜出したやうに取亂して、表二階の床の掛軸「喝」といふ字に、みしとくひつくと、拂子をサツと切破いた、返す、唯、一剃刀で。

此の事があつてから、婆さんの尼は、坂東三十三番に、人だすけの灸を施し、やがては高野山に上つて更に修行をすると云つて、飄然と家を出た。扮装が、男の古帽子を被り、草鞋で、片手に眞黒な信玄袋、片手に山伏の貝を吹いて、横町を其のまゝ出ました。西の方、其の坂東第一番に向つた。其の後沙汰はない。しかし、灸は實によく利いた、人間業に似ない、と界限一帯、近く芝、となり赤坂邊まで、其の行方を惜しむといひます。

——雪の家は、川崎邊へ越した、今はありません。

尼が畜生道に墮ちるのを救ふといつたのも、怪しい縁によつて、私をおびき寄せたのも、……何うもはじめから、兄洞齋の、可恐い嫉妬の怨念に酬ゆる、復讐の呪詛だつたとも思はれませぬ。しかし又怪しい業通によつて、豫て企圖したものだつたかも知れませぬ。何にしても、私のため

に、かはいさうな、はかない、お冬……」
と、いふとともに、直横は胸を切られたやうに、蒼ざめて、両手で肩を抱いたのでありました。毛が生えて居たかも知れない。血をはいて居たかも知れない。その胸を、とは、さすがに筆者も聞き得なかつた。

直横がなくなつて、もう三年になる。
筆者は、あの時以來、一本松へはまだ行つて見ないで居る。恐れて毛並は見定めなかつた、坂

縷紅新草

を驅出したのは、残つた獅子だつたかも知れません。
だから、家へ歸つて、少しばかり足を氣にしたのも、そんなにお笑ひにはなるまいと思ふ。
……

あれ〜見たか、

あれ見たか。

二つ蜻蛉が草の葉に、

かやつり草に宿をかり、

人目しのぶと思へども、

羽はうすものかくされぬ、

すきや明石に緋ぢりめん、

肌のしろさも浅ましや、

白い絹地の赤蜻蛉。

雪にもみぢとあざむけど、

世間稻妻、目が光る。

あれ〜見たか、

あれ見たか。

「をぢさん——其の提灯……」

「あゝ、提灯……」

唯今、午後二時半ごろ。

「私が持ちませう、磴に打撞りますわ。」

一肩上に立つた、其の肩も裳も、嫺な三十ばかりの女房が、白い手を差向けた。

お米といつて、これは其のをぢさん、辻町糸七——の従姉で、一昨年世を去つたお京の娘で、

土地に老舗の塗師屋ながしの妻女である。

撫でつけの水々しく利いた、おとなしい、静な圓髷で、頸脚がすつきりして居る。雪國の冬だ

けれども、天気は好し、小春日和だから、コオトも着ないで、着衣のお召で包むも惜しい、色の

清く白いのが、片手に、お京——その母の墓へ手向ける、小菊の黄菊と白菊と、あれは佗しくて、

こち〜と寂しいが、土地がら、今時はお定りの俗に稱ふる坊さん花、薊の軟いやうな穉紫の

小鶏頭を、一束にして添へたのと、一寸色紙の二本たばねの線香、一錢蠟燭を添へて持った、片

手を伸べて、「その提灯を」といつたのである。

山門を仰いで見る、處々、壊え崩れて、草も尾花もむら生えの高い磴を登りかゝつた、お米の實家の檀那寺——仙晶寺といふのである。が、燈籠寺といつた方が此の大城下によく通る。

去ぬる……いや、いつの年も、盂蘭盆に墓地へ燈籠を供へて、心ばかり小さな燈を灯すのは、此のあたり凡てかはりなく、親類一門、それ、知己の新佛へ志のやりとりをするから、十三日、迎火を焚く夜からは、寺々の卵塔は申すまでもない、野に山に、標石、奥津城のある處、昔を今に思ひ出したやうな無縁墓、古塚までも、かすかな顯つばい苔の花が、ちら／＼と切燈籠に咲いて、地の下の、灰白い寂しい亡靈の道が、草がくれ木の葉がくれに、暗夜には著く、月には幽けく、冥々として顯はれる。中でも裏山の峰に近い、此の寺の墓場の丘の頂に、一樹、榎の大木が聳えて、その梢に掛ける高燈籠が、市街の廣場、辻、小路。池、沼のほとり、大川縁。一里西に遠い荒海の上からも、望めば、仰げば、佇めば、みな空に、面影に立つて見えるので、名に呼んで知られて居る。

この燈籠寺に對して、辻町糸七の外套の袖から半間な面を出した晝間の提灯は、松風に颯と誘はれて、いま二葉三葉散りかゝる、折からの緋葉も灯れず、ぽか／＼と暖い磴の小草の日だまりに、あだ白けて、のびれば欠伸、縮むと、噓をしさうで可笑しい。

辻町は、欠伸と噓を縋へたやうな掛聲で、

「あゝ、提灯。いや、どっこい。と一段踏む。

「いや、どっこい。」
お米が莞爾、

「ほゝゝ、そんな掛聲が出るやうでは、をぢさん。」

「何、くたびれやしない。くたびれたといつたつて、こんな、提灯の一つぐらゐる。……尤も持重りがしたり、邪魔になるやうなら、一寸、こゝいらの薄の穂へ引掛けて置いても差支へはないんだがね。」

「それはね、誰も居ない、人通りの少い處だし、お寺ですもの。そこに置いといたつて、人が何うもしはしませんけれど。……持ちませうといふのに持たさないで、をぢさん、自分の手で……」

「自分の手で。」
「あんな、知らない顔をして、自分の手からお手向けなさりたいのでせう。こゝへ置いて行つては、お志が通らないではありませんか、悪いわ。」
「お叱言で恐入るがね、自分から手向けるつて、一體誰だい。」

「それは誰方だか、ほゝゝ。」
また莞爾。

「せいゝ、そんな息をして……此處がいゝ、一寸お休みなさいよ、さあ。」
丁ど段々中繼の一土間、向棧敷と云つた處、さかりに緋葉した樹の根に寄つた方で、うつむき態に片袖をさしむけたのは、縄れ、手を取らう身構へで、腰を靡娜に振向いた。踏掛けて塗下駄に、模様雪輪が冷くかゝつて、淡紅の長襦袢がはらりとこぼれる。

媚しさ、といふと雖も、お米はをぢさんの介添のみ、心にも留めなさうだが、人妻なれば憚られる。其處で、件の晝提灯を持直すと、柄の方を向うへ出した。黒塗の柄を引取つたお米の手は、尙ほ白くて優しい。

憚られもしようもの。磴たるや、山賊の構へた巖の砦の火見の階子と云つてもいゝ、縦横町條の家毎の屋根、辻の柳、遠近の森に隠顯しても、十町三方、城下を往來の人々が目を敬れば皆見える、見た其の容子は、中空の手摺にかけた色小袖に外套の熊蟬が留つたに其のまゝだらう。

蟬はひとりでジジと笑つて、緋葉の影へ翻然と飛移つた。
いや、翻然となんぞ、そんな器用に行くものか。

「ありがたう……提灯の柄のお力添に、片手を縄つて、一方に洋杖だ。こいつがまた素人が拾つ

た襷のやうで、うまく調子が取れないで、だらしなく袖へ搔込んだ處は情ない、まるで兩杖の形だな。」

「いやですよ。」

「意氣地はない、が、止むを得ない。お言葉に従つて一休みして行かうか。丁どお誂へ、苔滑……といふと冷いが、日當りで暖い所がある。さてと、ご苦勞を掛けた提灯を、これへ置かか。

樹下石上といふと豪勢だが、恙うした處は、地藏盆に筵を敷いて鉦をカン／＼と敲く、はつち坊主其のまゝだね。」

「そんなに、せつかちに腰を掛けてさ、泥がつきますよ。」

「構はない。破れ麻だよ。たかが墨染にて候だよ。」

「墨染でも、喜撰でも、所作舞臺ではありません、よごれますわ。」

「どうも、これは。きれいな其の手巾で。」

「散つて居るもみぢの方が、きれいです、拂つては澄まないやうな、こんな手巾。」

「何色といふんだい。お志で、石へ月影まで映して來た。あゝ、いゝ景色だ。いつも此處は、といふうちにも、今日はまた格別です。あひかはらず、海も見える、城も見える。」
といつた。

就中、公孫樹は黄也、紅樹、青林、見渡す森は、みな錦葉を含み、散残つた柳の緑を、うすく紗に綾取つた中に、層々たる城の天守が、遠山の雪の巔を抽いて聳える。そこから斜に濃い藍の一線を曳いて、青い空と一刷に同じ色を連ねたのは、いふ迄もなく田野と市街と城下を巻いた海である。荒海ながら、日和の穏かさに、渚の浪は白菊の花を敷流す……此の友禪をうちかけて、雪國の町は薄霧を透して青白い。その袖と思ふ一端に、周圍三里ときく湖は、晝の月の、半圓なるかと視められる。

「お米坊。」

をぢさんは、目を移して、

「景色もいゝが、容子がいゝな。——提灯屋の親仁が見惚れたのを知つてるかい。

（其の提灯を一つ、いくらです。）といったら、

（何うぞ早や、お持ちなされまして……お代はお次手の時、……は何うだい。そのかはり、遠國他郷のをぢさんに、賣りものを新聞づつみ、紙づつみにしようともしないんだぜ。豈それ見惚れたりと言はざるを得んやだ、親仁。」

「おつしやい。」

と銚子のかはりをたしなめるやうな口振で、

「旅の人だか何だか、草鞋も穿かないで、今時そんな、見たばかりで分りますか。それだし、此の土地では、まだ半季勘定がございます。……でなくつてもさ、當寺へお参りをする時、ゆきかへり通るんですもの。あの提灯屋さん、母に手を曳かれた時分から馴染です。……いやね、そんな空お世辭をいつて、澤山。……をぢさんお参りをするのに極りが悪いもんだから、おだてごかしに、はぐらかして。」

「待つた、待つた。——お京さん——お米坊、お前さんのお母さんの名だ。」

「はじめまして伺ひます、ほゝ。」

「ご挨拶、恐入つた。が、何々院——信女でなく、ごめんを被らう。その、お母さんの墓へお参りをするのに、何だつて、私がかままりが悪いんだらう。第一そのために来たんぢやないか。」

「……それはご遠慮は申しませんの。母の許へお参りをして下さいますのは分つて居ますけれどもね、其のさきに——誰かさん——」

「誰かさん、誰かさん……分らない。米ちゃん、一體その誰かさんは？」

「母が、いつも然ういつて居ましたわ。をぢさんは、（極りわるがり屋）といふ（長い屋）さんだから。」

「どうせ、長屋住居だよ。」

「ごめんなさい、そんなぢやありません。だからつても、何も私に——それとも、思ひ出さない、忘れたのなら、それはひどいわ、餘りだわ。誰かさんに、悪いわ、濟まないわ、薄情よ。」

「しばらく、しばらく、まあ、待つておくれ。これは思ひも寄らない。唐突の儀を承る。弱つたな、何だらう、といつちや尙ほ悪いかな、誰だらう。」

「眞個に忘れたんですか。それで可いんですか。嘘でせう。それだと餘りぢやありませんか。一層ちやんと言ひますよ、私から。——然ういつても釣出しにかゝつて私の方が極りが悪いかも知れませんが、……をぢさん、をぢさんが、むかし心中をしようとした、婦人のかた。」

「……………」

藪から棒をくらつて膨らんだ外套の、黒い胸を、辻町は手で壓へる眞似して、目を睜ると、

「もう堪忍してあげませう。餘り知らないふりをなさるから一寸驚かしてあげただけれど、それでも、もうお分りになつたでせう。——いつかの、其の時、花の盛の眞夜中に。——あの、お城の門のまはり、暗い堀の上を行つたり、來たり……」

お米の指が、行つたり來たり、ちら／＼と細く動くと、その動くのが、魔法を使つたやうに、向う遙かな城の森の下／＼りに、小さな男が、とぼんと出て、羽織も着ない、しよぼけた形を顯はすとともに、手を拱き、首を垂れて、とぼ／＼と歩行くのが臍に見える。それ、糧に飢ゑて死

なうとした。それが其の夜の辻町である。

同時に、もう一つ。寂しい、美しい女が、花の雲から下りたやうに、すつと翳つて、おなじ堀を垂々下りに、町へ續く長い坂を、胸を柔に袖を合せ、肩を細りと裙を浮かせて、宙に漾ふばかり。さし俯向いた頸のほんのり白い後姿で、捌く襖も揺ぐと見えない、もの靜かな品の好さで、夜はたゞ黒し、花明り、土の筏に流るゝやうに、満開の櫻の咲蔽ふ其の長坂を下りる姿が目につた。

——指を包め、袖を引け、お米坊。頸の白さ、肩のしなやかさ、餘り其の姿に似てならない。

今、目のあたり、坂を行く女は、あれは、二十ばかりにして、其の夜、(鳥をいふ) 千羽ヶ淵で自殺して了つたのである。身を投げたのは潔い。

卑怯な、未練な、おなじ處をとぼついた男の影は、のめ／＼と生きて、こゝに仙晶寺の磔の途中に、腰を掛けて居るのであつた。

「あゝ、まるで魔法にかゝつたやうだ。」

頬にあてて打傾いた掌を、辻町は冷く感じた。時に短く吸込んだ煙草の火が、チリ、と耳を掠めて、爪先の小石へ落ちた。

「また眞個夢がさめたやうだ。——其の時、夜あけ頃まで、堀の上をうろついて、いつ家へ歸つたか、草へもぐつたのか、蒲團を引被つたのか分らない。打ち踏めされたやうになつて寢た耳へ、

——兄さん……兄さん——

と、聞こえたのは、……お京さん。」

「返事をしませうか。」

「願はうかね。」

「はい、おほ。」

「申すまでもない、威勢のい、若い聲だ。然うだらう、お互に二十の歳です。——死んだ人は、たしか一つ上だつたやうに後で聞いて覚えて居る。前の晩は、雨氣を含んで、花あかりも朦朧と、霞に綿を敷いたやうだつた。格子戸外の其の元氣のい、聲に、むつくり起きると、おつと來たりで、目は窪んでゐる……額をさきへ、門口へ突出すと、顔色の青さを烘られさうな、からりとした春爛な朝景色さ。お京さんは、結びたての銀杏返で、半襟の淺黄の冴えも、黒縹子の帯の艶も、霞を拂つてきつぱりと立つて居て、(兄さん身投げですよ、お城の堀で。)(嘘だよ、こゝに活

きてるよ。)と、うつかり私が言つたんだから、お察しものです。すぐ背後の土間ぢや七十を越した祖母さんが、お櫃の底の、こそげ粒で、茶粥とは行きません、みぞれ雑炊を煮てござる。前々年、家が焼けて、次の年、父親がなくなつて、まるで、掘立小屋だらう。住むにも、食ふにも——昨夜は城のこゝかしこで、早い蛙がもう鳴いた、歌を唄つてる蟲けらが、凡そ羨しい、と云つた場合。……祖母さんは耳が遠いから可かつたものの、(活きてるよ。)は何事です。(何を寢惚けて居るんです。確乎するんです。)其の頃の様子を察して居るから、お京さん——まゝならない思遣りのじれつたさの疝癩筋で、ご存じの通り、一うちの眉を擧めながら、(……町内ですよ、此處の。いま私、前を通つて來ただけけれど、角の箔屋。——うちの人ぢやあない、世話になつて、はんけちの工場へ勤めて居た娘さんですよ。ちやんと目をあいて……あれ、あんなに人が立つて居る。)うらゝかな朝だけれど、路が一條、胡粉で泥塗たやうに、すつと白く、寂然として、家ならば、三町ばかり、手前どもとおなじ側です、けれども、何だか遠く離れた海際まで、突抜けに成つたやうで、其處に立つて居る人だかりが——身を投げたのは淵だといふのに——打つて來る波を避けるやうに、むらゝと動いて、地が其處ばかり、ぐつしより汐に濡れてゐるやうに見えた。

花はちら／＼と目の前へ散つて來る。

「乳の少し傍のところ。」

「まあさ。」

「知らない。」

「見えやしない、何にもないぢやないか、何處なのだね。」

「とたゞ青いだけですの。」

をぢさんは目を俯せながら、故と見まもつたやうに恚ういつた。

「見えない、何にもないぢやないか、何處なのだね。」

「知らない。」

「まあさ。」

「乳の少し傍のところ。」

私の小屋と眞向の……金持は焼けないね……しもた屋の後妻で、町中の意地悪が——今時はもう影もないが、——それ其の時飛んで来た、燕の羽の形に後を刎ねた、橋鬚とかいふのを小さくのつけたのが、門の敷石に出て来て立つて、おなじやうに箔屋の前を熟とすかして視て居た。其の繼娘は、優しい、うつくしい、上品な人だったが、二十にもならない先に、雪の消えるやうに白梅と一所に水で散つた。いぢめ殺したんだ、あの繼母がと、町内で沙汰をした。其の色の淺黒い後妻の眉と鼻が、箔屋を見込んだ横顔で、お米さんの前髪にくつき合つた、と私の目に見えた時さ。(いとしや。)と其の後妻が、(なう、ご親類の、ご新姐さん。)—悉しくはなくても、向う前だから、様子は知つてる、行來、出入りに、顔見知りだから、聲を掛けて、(いつ見ても、好容色なや、は、)と空笑ひをやつたとお思ひ、(非業の死とはいふけれど、根は身の行ひでござりますなう。)とじろりと二人を見ると、お京さん、御母堂だよ、い、かい。怪我にも眞似なかなさんなよ。即時、好容色な頤を打つけるやうにしゃくつて、(はい、さやうでござります、なう。)と云ふが疾いか、背中の子。」

辻町は、時に、まつげの深いお米と顔を見合せた。

「其の日は、當寺へお参りに來がけたつたのでね、……お京さん、磔が高いから半纏おんぶでなしに、淺黄鹿の子の紐でおぶつて居た。背中へ、べつかつこで、(ばあ。)といふと、カタ／＼と薄齒の音を立てて家中へ入つたらう。私が後妻に赤くなつた。

負つて居たのが、何を隠さう、こゝに好容色で立つて居る、さて、久しぶりでお目にかゝります。お前さんだ、お米坊——二歳、いや、三つだつたか。かぞへ年。」

「かぞへ年……」

「あ、然うか。」

「をぢさんの家の焼けた年、お産間近に、お母さんが、あの、火事場へ飛出したもんですから、その所爲ですつて……私には痣が。」

睫毛がふるへる。辻町は、ハツとしたやうに、ふと肩をすくめた。

「あら、うつかり、をぢさんだと思つて、つい。……眞紅でしたわ、おとなになつて今ぢや薄りとたゞ青いだけですの。」

をぢさんは目を俯せながら、故と見まもつたやうに恚ういつた。

「見えない、何にもないぢやないか、何處なのだね。」

「知らない。」

「まあさ。」

「乳の少し傍のところ。」

「きれいだな、眉毛を一つ剃つた痕か、雪間の若菜……とでも言つて居ないと——父がなくなつて歸つたけれど、私が一度無理に東京へ出て居た留守です。私の家のために、お京さんに火事場を踏ませて申譯がないよ。——處で、その嬰兒が、今お見受け申すお姿となつたから、もうかれこれ三十年。……だもの、記憶も何も朧々とした中に、其の悲しいうつくしい人の姿に薄明りがさして見える。遠くなつたり、近くなつたり、途中で消えたり、目先へ出たり——此方も、とぼとぼと死場所を探して居たんだから、どうも人目が邪魔になる。さきでも目障りになつたらう。やがて夜中の三時過ぎ、天守下の坂は長いからね、坂の途中で見失つたが、見失つた時の後姿を一番はつきりと覚えて居る。だから、其の人が淵で死んだとすると、一旦町へ下りて、もう一度、坂を引返した事になるんだね。」

たゞし、然ういつた處で、あくる朝、町内の箔屋へ引取つた身投げの娘が、果して昨夜私が見た人と同じだか何うだか、實の處は分りません……それは今でも分りはしない。堀端では、前後一度だつて、横顔の鼻筋だつて、見えないばかりか、解りもしない。が、朝、お京さんに聞いたばかりで、すぐ、あゝ、其だと思つたのも、おなじ死ぬ氣の、氣で感じたのであらうと思ふ……と、お京さんが、むかうの後妻の目をそらして、格子を入つた。おぶさつたお前さんが、それ、今のべつかつこで、妙な顔……」

「え、ほ、ほ。」

とお米は軽く咲容して、片袖を胸へあてる。

「お京さん、いきなり内の祖母さんの背中を一つトンと敲いたと思ふと、鐵鍋の蓋を取つて覗いたつけ、勢のよくない湯氣が上る。」

お米は軽く鬢を撫でた。

「ちよろ／＼と燃えてる、竈の薪木、其の火だがね、何だか身を投げた女をあぶつて暖めて居るやうな氣がして、消えぎえに其處へ、袖袂を纏れて倒れた、ぐつしより濡れた髪と、眞白な顔が見えて、まるで其がね、向う門に立つて居る後妻に、はかない戀をせかれて、五年前に、おなじ淵に身を投げた、優しい姉さんのやうにも思はれた。餘程どうかして居たんだね。」

半壊れの車井戸が、すぐ傍で、底の方に、ばたん、と寂しい雫の音。

ざら／＼と水が響くと、

身投げだ——

別嬪だ——

身投げだ——

と戸外を喚いて人が驅けた。

この騒ぎは——さあ、それから多日、四方、隣國、八方へ、大波を打つたらうが、

——三年の間、かたい憤み——

だつてね、お京さんが、その女の事については、當分、口へ出してうはささへしなれば、また私にも、話さへさせなかつたよ。

——おなじ櫻に風だもの、兄さんを誘ひに来ると悪いから——

其の晩、おなじ千羽ヶ淵へ、すぶくの黥間だつたのに、慙死にはぐれると、今さら氣味が悪くなつて、町をうろつくにも、山の手の辻へ廻つて、箔屋の前は通らなかつた。……

此の土地の新聞一種、買つては讀めない境遇だつたし、新聞社の掲示板の前へ立つにも、土地は狭い、人目に立つ、死出三途ともいふ處を、一所に徜徉つた身體だけに、自分から氣が怯けて、避けるやうに、避けるやうに、世間のうはさに遠ざかつたから、花の散つたのは、雨か、嵐か、人に礫を打たれたか、邪慳に枝を折られたか。今もつて、取留めた、悉しい事は知らないんだが、それも、もう三十年。

……お米さん、私は、おなじ其の年の八月——こゝいらはまだ、月おくれだね、盂蘭盆が過ぎから、いつも大好きな赤蜻蛉の飛ぶ時分、道があいて、東京へ立てたんだが。——

——あゝ、然うか。——

辻町は、息を入ると、石に腰をすらしして、ハタと軽く膝をたゝいた。

三

その時、外套の袖にコトンと動いた、石の上の提灯の面は、又をかしい。いや、をかしくない、大空の雲を淡く透して蒼白い。

「……さて、此だが、手向けるとか、供へるとか、お米坊のいふ——誰かさんは——」

「えゝ、然うなの。」

と、小菘と坊さん花を一寸圍つて、お米は靜に頷いた。

「その嬰兒が、串戯にも、心中の仕損ひなどといふ。——いづれ、あの、いけずな御母堂から、いつかその前後の事を聞かされて、それで知つて居るんだね。」

不思議な、怪しい、縁だなあ。——花あかりに、消えて行つた可哀相な人の墓はいかにも、此の燈籠寺にあるんだよ。

若氣のいたり。……」

辻町は、額をおさへて、提灯に俯向いて、

「何と思つたか、東京へ——出發間際、人目を忍んで……といふと悪く色氣があります。何、こ

そくくと、鼠あるき、行燈形の小さな切籠燈の、就中、安價なのを一枚細腕で引いて、梯子段の片暗がり忍ぶやうに、此の磴を隅の方から上つて来た。胸も、息も、どきどきしながら。

ゆかただか、羅だか、女郎花、桔梗、萩、それとも薄か、淡彩色の燈籠より、美しく寂しからう、白露に雫をしさうな、その女の姿に供へる氣です。

中段さ、丁ど今居る。

然るに、何うだい。お米坊は洒落にも私を、薄情だといふけれど、人間の薄情より三十年の月日は情がない。此の提灯でいふのぢやないが、燈臺下暗しで、とぼんとして氣がつかかなかつた。申譯より、面目がないくらゐだ。

——すまして饒舌つて可いか知らん、その時は、此のもみぢが、青葉で眞黒だつた下へ来て、上へ墓地を見ると、向うの峯をぼつと、霧にして、木曾のは、き木だね、こゝぢや、見えない。が、有名な高燈籠が榎の梢に灯れて居る……葉と葉をくゞつて、燈の影が露を誘つて、ちらくくと樹を傳ふのが、長くかゝつて、幻の藤の總を、すつと靡かしたやうに仰がれる。繪の模様は見えないが、まるで、其の高燈籠の宙の袖を、其の人の姿のやうに思つて、うっかりとして立つた。

——あゝ、呆れた——

目の前に、白いものと思つたつけ、山門を眞下りに、藍がかつた浴衣に、晝夜帯の婦人が、

——身投げに逢ひに來ましたね——

言ふ事も言ふ事さ、誰だと思ひます。御母堂さ。それなら、言ひさうな事だらう。いきなり、ぐわんと撲はされたから、をぢさんの小僧、目をまるくして膽を潰した。然うだらう、當の御親類の墓地へ、といつては、つひぞ、つけとゞけ、盆のお義理なんぞに出向いた事のない奴が、

辻町は提灯を押へながら、

「酒買ひ狸が途惑をしたやうに、燈籠をぶら下げて立つて居るんだ。」

いふ事が捷早いよ、お京さん、然う、のつけにやられたんぢや、事實、親類へ供へに來たものにした處で、然うとはいへない。

——初路さんのお墓は——

如何にも、若い、優しい、が、何だか、弱々とした、身を投げた女の名だけは、いつか聞いて居た。

——お墓の場所は知つて居ますか——

知るもんですか。お京さんが、崖で夜露に沁る處へ、石ころ道が切立でて危いから、そんなにとぼついて居るんぢや怪我をする。お寺へ預けて、晝間あらためて、お参りを、然うなさい、といふ。此方はだね。日中のこゝく出られますか。何、志はそれで済むから此の石の上へ置いた

なり歸らうと、降參に及ぶとね、犬猫が踏んでも、きれいなお精靈が身震ひをするだらう。——
とに角、お寺まで、と云つて、お京さん、今度は片褌をきり、と端折つた。

此方も其の要心から、故と夜になつて出掛けたのに、今頃まで、何をして居たらう。(遊んで居た。世の中の煩さ、がなくて寺は涼しい。裏縁に引いた山清水に……西瓜は驕りだ、和尚さん、小僧には内證らしく冷して置いた、紫陽花の影の映る、青い心太をつる、と突出して、芥子を利かして、冷い涙を流しながら、見た處三百ばかりの墓燈籠と、草葉の影に九十九ばかり、お精靈の幻を見て涼んで居た、その中に初路さんの姿も)と、お京さん、好きなお轉婆をいつて、山門を入つた勢だからね。……その勢だから……向つた本堂の横式臺、あの高い處に、晩出の參詣を待つて、お納所が、盆禮、お返しおしるしと、紅白の麻絲を三寶に積んで、小机を控へた前へ。どうです、私が引込むんだから、お京さん、引取つた切籠燈をツイと出すと、

——此の春、身を投げた、お嬢さんに。……心中を仕損つた、此の人の、こゝろざし——
私は門まで遁出したよ。あとをカタ〜と追つて返して、

——それ、紅い絲を持つて來た。縁結びに——白いのが好かつたか知ら、……あひては幻と頬をかすられて、私は此の中段まで轉げ落ちた。些と大袈裟だがね、遠くの暗い海の上で、

稲妻がして居たよ。其の夜、途中からえらい降りて。……

辻町は夕立を懐ふ如く、少時息を沈めたが、やがて、一寸語調をかへて云つた。

「お米坊、そんな、こんな、お母さんに聞いて居たのかね。」

「え、お嫁に行つてから、あと……」

「然うだらうな、あの氣象でも、極りどころは整然として居る。嫁入前の若い娘に、餘り聞かせる事ぢやないから。」

——さて、問題の提灯だ。成程、其の人に、切籠燈のかはりに供へると、思つたのは尤だ。が、そんな、實は、しをらしいとか、心入れ、とかいふ奇特なんぢやなかつたよ。懺悔をするがね、實は我ながら、とぼけて居て、ひとりでをかしいくらるなんだよ。月夜に提灯が贅澤なら、眞晝間ぶらで提げたのは、何だらう、餘程半間さ。

といふのがね、先刻お前さんは、連にはぐれた觀光團が、鼻の下を伸ばして、うつかり見物して居る間拔けに附合ふ氣で、黙つてついて居てくれたけれど、來がけに坂下の小路中で、あの提灯屋の前へ、私が茫乎突立つたらう。

場所も方角も、まるで違ふけれども、むかし小學校の時分、學校近所の……あすこは大川近の窪地だが、寺があつて、其の門前に、店の暗い提灯屋があつた。髻のある親仁が、紺の筒袖を、斑々の胡粉だらけ。腰衣のやうな幅廣の前掛したのが、泥繪具だらけ、青や、紅や、其のま、轉がつたら、樂書の獅子になりさうで、牡丹をこつてりと刷毛で彩る。緋を桃色に颯と流して、ぼかす手際が鮮彩です。それから鯉の瀧登り。八橋一面の杜若は、風呂屋へ進上の祝だらう。そんな比羅繪を、のし掛つて描いて居るのが、嬉しくて、面白くつて、繪具を解き溜めた大摺鉢へ、鞠子の宿ぢやないけれど、薯蕷汁となつて溶込むやうに……學校の歸途には其の軒下へ、いつまでも立つて見て居た事を思出した。時雨も霽も知つて居る。夏は學校が休です。櫻の春、また雪の時なんぞは、その緋牡丹の燃えた事、冴えた事、葉にも苔にも、パツ／＼と惜氣なく金銀の箔を使ふのが、御殿の廊下へ日の射したやうに輝いた。然うした時は、家へ歸る途中の、大川の橋に、綺麗な牡丹が咲いたつけ。

先刻のあの提灯屋は、繪比羅も何にも描いては居ない。番傘の白いのを日向へ並べて居たんだが、つい、その昔を思出して、餘り店を覗いたので、たゞぢや出て來にく、なつたもんだから、觀光團お買上げさ。

——ご紋は——

——牡丹——

何、描かせては手間がとれる……第一實用むきの氣といつては、聊もなかつたからね。これは、傘でもよかつたよ。パツと擴げて、菊を持ったお米さんに、背後から差掛けて登れば可かつた。「どうぞぞ。……女萬歳の廣告に。」

「仰せのとほり。——いや、串戲はよして。いまの並べた傘の小間隙間へ、柳を透いて日のさすのが、銀の色紙を擴げたやうな處へ、お前さんの其の花について居たらう、蝶が二つ、あの店へ翔込んで、傘の上へ舞つたのが、雪の牡丹へ、ちら／＼と箔が散浮く……」

其のま、に見えたと思つた時も——箔——すぐ此の寺に墓のある——同町内に、ぐつしよりと濡れた姿を儂く引取つた——箔屋——にも氣がつかかなかつた。薄情とは言はれまいが、世帯の苦勞に、朝夕は、細く刻んでも、日は遠い。年月が餘り隔ると、目前の菊日和も、遠い花の霞になつて、夢の朧が消えて行く。

が、あらためて、澄まない氣がする。御母堂の奥津城を展じたあとで。……ずつと離れて居るとい、んだがな。近いと、どうも、此の年でも極りが悪い。きつと冷かすぜ、石塔の下から、クツ／＼、カラ／＼と先づ笑ふ。」

「こはい、をぢさん。お母さんだがい、けれど。……私がついて居ますから、冷かしはしません

から、よく、お拜みなさいませよね。

——（糸塚）さん。」

「糸塚……初路さんか。糸塚は姓なのかね。」

「い、え、あら、然う……をぢさんは、ご存じないわね。」

——糸塚さん、糸巻塚ともいふんですつて。

此の谷を一つ隔てた、向うの山の中途に、鬼子母神様のお寺がございませう。」

「あ、柘榴寺——眞成寺。」

「一寸ごめんなさい。私も端の方へ、少し休んで。……い、え、構ふもんですか。落葉といつて

も錦のやうで、勿體ないほどですわ。あの柘榴の花の散つた中へ、鬼子母神様の雲だといつて、

草履を脱いで坐つたのも、つい近頃のやうですもの。お母さんにつれられて。白い雲、青い雲、

紫の雲は何様でせう。鬼子母神様は紅い雲のやうに思はれますね。」

墓所は直近ののに、面影を遙かに偲んで、母親を想ふか、お米は恍惚して云つた。

——聞くとともに、辻町は、其の壯年を三四年、相州返子に過ぎた時、新婚の渠の妻女の、

病厄のために將に絶えなむとした生命を、醫療も且よ。まさしく觀世音の大慈の利險に生きたこ

とを忘れない。南海靈山の岩殿寺、奥の御堂の裏山に、一處咲満ちて、春たけなはな白光に、奇

ある。——
しき薫の漲つた紫の葦の中に、白山兔の飛ぶのを視つつ、病中の人を念じたのを、此の時まさ
まざと、目前の雲に視て、輝く靈巖の臺に對し、さしうつむくまで、心裏に、恭禮默拜したので

ある。——
お米の横顔さへ、蕩たけて、

「柘榴寺、ね、をぢさん、彼處の寺内に、初代元祖、友禪の墓がございませう。一頃は訪ふ人どこ

ろか、苔の下に土も枯れ、水も涸いて居たんですが、近年他國の人たちが方々から尋ねて来て、

世評が高いもんですから、記念碑が新しく建ちましてね、名所のやうに成りました。それでね、

ここのお寺でも、新規に、初路さんの、矢張り記念碑を建てる事になつたんです。」

「は、あ、和尚さん、娑婆氣だな、人寄せに、黒棒で……と身を投げた人だから、薄彩色水繪具

の立看板。」

「黙つて。……い、え、お上人よりか、檀家の有志、縣の觀光會の表向きの仕事なんです。お

寺は地所を貸すんです。」

「葬つた土とは別なんだね。」

「え、それで、糸塚、糸巻塚、どつちにしようかつていつてるところ。」

「どつちにしろ、友禪の(染)に對する(絲)なんだらう。」

「そんな、たゞ思ひつき、趣向ですか、そんなんぢやありません。あの方、はんけちの工場へ通つて、縫取をしていらしつてさ、それが原因で、あんな事になつたんですもの。絲も紅絲からですわ。」

「絲も紅絲……はんけちの工場へ通つて、縫取をして、それが原因?……」

「まあ、何にも、ご存じない。」

「怪我にも心中だなどといふ、然ういつちや、しかし濟まないけれども、何にも知らない。おなじ寫眞を並んで取つても、大勢の中だと、いつとなく、生別れ、死別れ、年が経つと、其つ切になる事もあるからね。」

辻町は向直つていつたのである。

「蟹は甲らに似せて穴を掘る……も可訝いかな。おなじ穴の狸……飛んでもない。一升入の瓢は一升だけ、何しろ、當推量も左前だ。誰もお極りの貧のくるしみからだと思つて居たよ。」

また、事實然うであつた。

「まあ、然うですか、いふのもお可哀相。あの方、それは、おくらしに賃仕事をなすつたでせう。けれど、もと、千五百石のお邸の女藤さん。」

「お、ざつとお姫様だ。あ、惜しい事をした。あの晩一緒に死んで置けば、今頃はうまれかはつて、小いろの一つも持つた果報な男に成つたらう。……絲も、紅絲は聞いても床しい。」

「それどころぢやありません。其の絲から起つた事です。千五百石の女藤ですが、初路さん、お妾腹だつたんですつて。それでも一粒種、い、月日の下に、生れなすつたんですけれど、廢藩以來、ほどなく、お邸は退轉、御兩親も皆あの世。お部屋方の遠縁へ引取られなさいましたのが、いま、お話のありました箔屋なのです。時節がら、箔屋さんも暮しが安易でないために、工場通ひをなさいました。お邸育ちのお慰みから、縮緬細工もお上手だし、お針は利きます。すぐ第一等の女工さんで極上等のものばかり、はんけちと云つて、薄色もありませうが、おもに白絹へ、蝶花を綺麗に刺繡をするんですが、い、品は、國産の譽れの一つで、内地より、外國へ高級品で出たんですつて。」

「或程。」

四

あれ〜見たか

あれ見たか

「あれ〜見たか、あれ見たか、二つ蜻蛉が草の葉に、かやつり草に宿かりて……其の唄を、工場で唱ひましたつてさ。唄が初踏さんを殺したんです。」

細い、かやつり草を、青く縁へとつて、其の片端、はんけちの雪のやうな地へ赤蜻蛉を二つ。」
お米の二つ折る指がしなつて、内端に襟をおさへたのである。

「一ツつ、蜻蛉が別ならよかつたんでせうし、外の人の考案で、あの方、たゞ刺繍だけなら、何でもなかつたと言ふんです。どの道、うつくしいのと、仕事の上手なのに、嫉み猜みから起つた事です。何につけ、彼につけ、ゆがみ曲りに難癖をつけないでは措きません。處を圖案まで、あの方がなさいました。何から思ひつきなすつたんだか。——その赤蜻蛉の刺繍が、大層な評判だし、分けて輸出さきの西洋の氣受が、それは、凄いで、どし〜註文が來ました處から、外國まで、恥を曝すんだつて、羽をみんな、手足にして、紅いのを縮緬のやうに唄ひ囃して、身肌を見せたと、騒ぐんでせう。」

(巻初に記して一祭に供した俗謡には、二三行、

.....

脱落があるらしい、お米が口誦を憚つたからである。)

「いやですわね、をぢさん、蝶々や、蜻蛉は、あれは衣服を着て居るでせうか。」

——人目しのぶと思へども

羽はうすもの隠されぬ——

それも一つならまだしもだけれど、一つの尾に一つが續いて、すつと、あの、羽を八つ、靜かに銀糸で縫つたんです、寝て居やしません、飛んでるんですわね。え、それをですわ、

——世間、いなづま目が光る——

——恥を知らぬか、恥ぢないか——と皆でわあ〜、さも初踏さんが、そんな姿繪を、紅い毛、碧い目にまで、露呈に見せて、お寶を儲けたやうに、唱ひ立てられて見た日には、内氣な、優しい、上品な、着ものの上から觸られても、毒蛇の牙形が膚に沁みる……雪に咲いた、白玉椿のお人柄、耳たぶの赤くなる、もうそれが、碎けるのです、散るのです。

遺書にも、あつたさうです。——あ、恥かしいと思つたばかりに——

「察しられる、思ひやられる。お前さんも聞いて居ようか。むかし、正しい武家の女性たちは、拷問の筈、火水の責にも、斷じて口を開かない時、唯、衣を褫ふ、肌着を剥ぐ、裸體にするといふとともに、直ちに罪に落ちたといふんだ。——そこへ掛けると……」

辻町は、かくも心弱い人のために、西班牙セビイラの煙草工場のお轉婆を羨んだ。
同時に、お米の母を思つた。お京がもし其の場に處したら、對手の工女の顔に象棋盤の目を切るかはりに、酔ながら心太を打ちまけたらう。

「そこへ掛けると平民の子はね。」

辻町は、うつかりいつた。

「だつて、平民だつて、人の前で。」

「いゝえ。」

「え、どうせ私は平民の子ですから。」

辻町は、其の乳のわきの、青い若菜を、ふと思つて、覺えず肩を縮めたのである。

「あやまつた。いや、しかし、千五百石の女藤、昔ものがたり以上に、あはれにはかない。而うして清らかだ。」

「中将姫のやうでしたつて、白羽二重の上へ上ると、あの方、白い指が消えました。露が光るやうに、針の尖を傳つて、薄い胸から紅い糸が揺れて染まつて、また膝つて、銀の糸がきら／＼と、何枚か、幾つの蜻蛉が、すい／＼と浮いて寫る。——（私が傍に見て居ました）つて、鼻ひしやげの其の頃の工女が、茄子の古漬のやうな口を開けて、若い年で話すんです。その女だつて、その

臭い口で聲を張つて唱つたんだと思ふと、聞いて居て、口惜しい、睨んでやりたいやうですわ。

——でも自害をなさいました、後一年ばかり、一時は此の土地で湯屋でも道端でも唄つて、お氣の弱いのをたつとむまでも、初路さんの刺繍を恥かしい事にいひましたとさ。

——あれ／＼見たか、あれ見たか——、銀の羽がそのまゝ、手足で、二つ蜻蛉が何とかですもの。

「一體また二つの蜻蛉が何故變だらう。見聞が狭い、知らないんだよ。土地の人は——然ういふ私だつて、近頃まで、つい氣がつかずに居たんだがね。」

手紙の次手で知つておいでだらうが、私の住んで居る處と、京橋の築地までは、然うだね、此處から、ずつと見て、向うの海まではあるだらう。今度、當地へ來がけに、齒が疼んで、馴染の齒科醫へ行つたとお思ひ。その築地は、といふと、用たして、齒科醫は大廻りに赤坂なんぞよ。途中、四谷新宿へ突抜けた麴町の大通りから三宅坂、日比谷、……銀座へ出る……歌舞伎座の前を真直に、目的の明石町までと饒舌つてもいゝ、加減の間、町充滿、屋根一面、上下、左右、縦も横も、微紅い光る雨に、花吹雪を浮かせたやうに、羽が透き、身が染つて、數限りもない赤蜻蛉の、大流れを漲らして飛ぶのが、行違つたり、田に舞亂れたりするんぢやあない、上へ斜、下へ斜、右へ斜、左へ斜といつた形で、おなじ方向を真北へさして、見當は淺草、千住、それから先は

何處までだか、幾ど想像にも及びません。——明石町は晝の不知火、隅田川の水の影が映つたよ。

で、急いで明石町から引返して、赤坂の方へ向ふと、また、おなじやうに飛んで居る。群れて行く。齒科醫で、椅子に掛けた。窓の外を、此の時は、幾分か、其の数はまばらに見えたが、それでも、千や二千ぢやない、二階の窓をすれすれの處に向ふ家の廂見當、丁ど電信、電話線の高さを飛ぶ。それより、高くもない。すつと低くもない。どれも、おなじくらゐるな空を通るんだがね、計り知られない其の大群は、層を厚く、密度を濃かにしたのぢやなくつて、薄く透通る。其の一つ一つの薄い羽のやうにさ。

何の事はない、見た處、東京の低い空を、淡紅一面の紗を張つて、銀の霞に包んだやうだ。聳立つた、洋館、高い林、森なぞは、さながら、夕日の紅を巻いた白浪の上の巖の島と云つた態だ。ついで口へ出た。(蜻蛉が大層飛んで居ますね。) 齒醫師が(はあ、早朝からですよ。)と云つたがね。其の時は四時過ぎです。

歸途に、赤坂見附で、同じことを、運轉手に云ふと、(今は少くなりました。こんなもんぢやありません。今朝六時頃、此の見附を、客人で通りました時は、上下、左右すれ違ふとサワ／＼と音がします。青空、青山、正面の雪の富士山の雲の下まで裾野を蔽ふといひます紫雲英のやうに、いつばいいます。赤蜻蛉に乘せられて、車が浮いて困つてしまひました。こんな経験ははじめてで

す。)と更めて吃驚したやうに言ふんだね。私も、その日ほど夥しいのは始めてだつたけれど、赤蜻蛉の群の一日都會に漲るのは、秋、おなじ頃、幾ど毎年と云つてもいい。子供のうちから大好きなんだけれど、これに氣のついたのは、——うっかりぢやないか——此の八九年以來なんだが、月ばかりありません。きつと十月、中の十日から二十日の間、三年つゞいて十七日といふのを、手帳につけて覚えて居ます。季節、天氣といふものは、そんなに模様の変らないものと見えて、いつの年も秋の長雨、しけつゞき、また大あらしのあつた翌朝、からりと、嘘のやうに青空になると、待つてたやうに、しづめたり浮いたり、風に、すら／＼すら／＼と、薄い紅い霧をほぐして通る。

——此の邊は、何うだらう。」

「え。」

話にきゝとれて居た所爲ではあるまい、お米の顔は緋葉の蔭にほんのりして居た。

「……もう晚いでせう、今日は一つも見えませせんわ。前の月の命日に參詣をしました時、山門を出て……あら、このい、日和にむら雨かと思ひました。赤蜻蛉の羽がまるで銀の雨の降るやうに見えたんです。」

「一ツづゝかね。」

「ひとツづゝ?」

「二ツづゝではなかつたかい。」

「さあ、それはどうですか、一寸私氣が付きません。」

「氣がつくまい、然うだらう。それを言ひたかつたんだ、いまの蜻蛉の群の話は。それがね、残らず、二つだよ、比翼なんだよ。其の刺繡の姿と、おなじに、此を見て土地の人は、初路さんを殺したやうに、どんな唄を唱ふだらう。」

みだらだの、風儀を亂すの、恥を曝すのといつて、何うする氣だらう。浪で洗へますか、火で焼けますか、地震だつて壊せやしない。天を蔽ひ地に漲る、といつた處で、颯風があれば消えるだらう。儂いものではあるけれども——あ、その儂さを一人で身に受けたのは初路さんだね。」

「えゝ、ですから、ですから、をぢさん、其のお慰めかたぐ……今では時世がかはりました。供養のために、初路さんの手技を稱め贊へようと、それで、「糸塚」といふ記念の碑を。」

「……………」

「もう、出来かゝつて居るんです。圖取は新聞にも出て居ました。臺石の上へ、見事な白い石で大きな絲粹を据ゑるんです。刻んだ絲を巻いて、丹で染めるんだつていふんですわ。」

「其處で、「友禪の碑」と、對するの。しかし、いや、兎に角、悪い事ではない。場所は、位置は。」

「さあ、行つて見ませう。半分うへ出来て居るやうです。門を入つて、直きの場所です。」

辻町は、あの、盂蘭盆の切籠燈に對する、寺の會釋を傳へて、お京が渠に戯れた紅絲を思つて、ものに手繰られるやうに、提灯とともにふらりと立つた。

五

「おばけの……蜻蛉？……をぢさん。」

「何、そんなものの居よう筈はない。」

と然も落着いたらしく、聲を沈めた。其の癖、唯た今、思はず、「呀！」といつたのは誰だらう。

いま辻町は、蒼然として苔蒸した一基の石碑を片手で抱いて——いや、抱くなどといふのは憚からう——霜より冷くつても、千五百石の女臈の、石の軀ともいふべきものに手を添へて居るのである。たゞし、その上に、沈んだ藤色のお米の羽織が袖をすなりと墓のなりにかゝつた、が、織だか、地紋だか、影繪のやうに細い柳の葉に、菊らしいのを薄色に染出したのが、白い山土に敷かれた、枯草の中に咲残つた、一叢の嫁菜の花と、入交ぜに、空を蔽うた雑樹を洩れる日光に、幻の影を籠めた、墓はさながら、梢を落した、うらがなしい綺麗な錦紗の燈籠の、うつむき伏

した風情がある。

こゝは、切立といふほどではないが、巖組みの徑が峻しく、砕いた薬研の底を上る、涸れた瀧の痕に似て、草土手の小高い處で、曇々と墓が並び、傾き、又倒れたのがある。

上り切つた卵塔の一劃、高い處に、裏山の峯を抽いて繁つたのが、例の高燈籠の大榎で、巖を縫つて蟠つた根に寄つて、先祖代々とともに、お米のお母さんが、ぱつと目を開きさうに眠つて居る。其處も蔭で、薄暗い。

それ、持參の晝提灯、土の下から嚙ぞ、半間だと罵倒しようが、白く据つて、ぼつと包んだ線香の煙が靡いて、裸蠟燭の灯が、静寂な風に、ちら／＼する。

榎を潜つた彼方の崖は、すぐに、大傾斜の窪地になつて、山の裾まで、寺の裏庭を取りまはして一谷一面の卵塔である。

初路の墓は、お京のと相向つて、や、斜下、左の草土手の處にあつた。

見たまへ——お米が外套を折疊みにして袖に取つて、背後に立添つた、前踞みに、辻町は手、其の石碑にかけた羽織の、裏の媚かしい中へ、さし入れた。手首に冴えて淡藍が映える。片手には、頑丈な、錆の出た、木鋏を構へて居る。

此の大剪刀が、もし空の樹の枝へでも引掛つて居たのだと、うつかり手にはしなかつたらう。

盂蘭盆の夜が更けて、燈籠が消えた時のやうに、羽織で包んだ初路の墓は、あはれにうつくしく、且つあたりを籠めて、陰々として、鬼氣が籠るのであつたから。

鋏は落ちて居た。これは、寺男の爺やまじりに、三人の日傭取が、ものに驚き、泡を食つて、遁出すのに、投出したものであつた。

其の次第は恠うである。

はじめ二人は、磔から、山門を入ると、廣い山内、鐘樓なし。松を控へた墓地の入口の、鎖さない木戸に近く、八分出來といふ石の塚を視た。臺石に特に意匠はない、つい通りの巖組一丈餘りの上に、誂への杵を置いた。が、あの、くる／＼と糸を廻す棒は見えぬ。くり抜いた跡はあるから、此には何か考案があるらしい。お米もそれはまだ知らなかつた。杵の四つの柄は、其の半面に對しても幸に鼎に似ない。鼎に似ると、煮るも烙くも、いづれ纖楚い人のために見える目も忍びないであらう處を、恰好、玉を捧ぐる白珊瑚の滑かなる枝に見えた。

「かへりに、ゆつくり拜見しよう。」

その母親の展墓である。自分からは急がすのをためらつた案内者が、

「道が悪いですから、氣をつけてね。」

わあ、わつ、わつ、わつ、わつ、おう、ふうと、鼻呼吸を吹いた面を並べ、手を挙げ、胸を敲き、拳

を振りなど、なだれを打ち、足たづらを踏んで、一時に四人、摺違ひに木戸口へ、茶色になつて湧いて出た。

其の聲も聲音も、響くと、もろともに、落ちかゝつたばかりである。

不意に打つかりさうなのを、軽く身を抜いて路を避けた、お米の顔に、鼻をまともに突向けた、先頭第一番の爺が、面も、脛も、一縮みの皺の中から、ニンガリと變に笑つたと思ふと、

「出ただえ、幽霊だあ。」

幽霊。

「おッさん、蛇、蝮？」

お米は——幽霊と聞いたのに——一寸眉を擡めて、蛇、蝮を憂慮つた。

「那樣なもんぢやねえだア。」

如何にも、那樣なものには怯えまい、面魂、印半纏も交つて、布子のどんつく、半股引、空脛が入亂れ、屈竟な日傭取が、早く、糸塚の前を摺抜けて、松の下に、ごしや〜とかたまつた中から、寺爺やの白い眉の、びく〜と動くが見えて、

「蜻蛉だあ。」

「幽霊蜻蛉ですだアい。」

と、冬の麥稈帽を被つた、若いのが聲を掛けた。

「蜻蛉なら、幽霊だつて。」

お米は、莞爾して坂上りに、衣紋のやゝ亂れた、淺黄を雪に透く胸を、身繕ひもせず、そのまま、見返りもしないで木戸を入つた。

巖は鋭い。踏上げる徑は峻しい。が、お米の雙の爪さきは、白い蝶々に、をぢさんを載せて、高く導く。

「何だい、今のは、あれは。」

「久助つて、寺爺やです。卵塔場で働いて居て、休みのお茶のついでに、私をからかつたんでせう。子供だと思つて居る。をぢさんがいらつてもやるのに、見さかひがない。馬鹿だよ。」

「若いお前さんと、一緒にからかはれたのは嬉しいがね、威かすにしても、寺で幽霊をいふ奴があるものか。それも蜻蛉の幽霊。」

「蛇や、蝮でさへなければ、蜥蜴が化けたつて、そんなに可恐いもんですか。」

「居るかい。」

「時々。」

「居るだらうな。」

「でも、此の時節。」

「よし、私だつて驚かない。しかし、何だらう、あゝ、然うか。おはぐるとんぼ、黒とんぼ。また、何とかいつたつけ。漆のやうな眞黒な羽のひらくする、織く青い、たしか河原蜻蛉とも云つたと思ふが、あの事ぢやないかね。」

「黒いのは精靈蜻蛉ともいひますわ。幽霊だなんのつて、あの爺い。」

爾時であつた。

「あゝ。」

と、お米が聲を立てると、

「酷いこと、墓を。」

といつた。聲とともに、着た羽織をすつと脱いだ、が、紐を何う解いたか、袖を何う、手の菊へ通したか、それは知らない。花野を颯と靡かした、一筋の風が藤色に通るやうに、早く、其の墓を包んだ。

向う傾けに草へ倒して、ぐる／＼巻といふよりは、がんじ搦みに、ひしと荒縄の汚いのを、無残にも。

「初路さんを、——初路さんを。」

これが女蔦の碑だつたのである。

「蔦にも、蔦にも包まないで、まるで裸にして。」

と氣色ばみつつ、且つ恥ぢたやうに耳朶を紅くした。

いふまじき事かも知れぬが、辻町の目にも咄嗟に印したのは同じである。臺石から取つて覆へした、持扱ひの荒くれた爪摺れであらう、青々と苔の蒸したのが、處々搦られて、日の隈幽に、石肌の浮いた影を膨らませ、影を又凹ませて、残酷に搦めた、さながら白身の窶れた女を、反接緊縛したに異ならぬ。

推察に難くない。いづれかの都合で、新しい糸塚のために、この位置を動かして持運ぼうとしたりしい。

が、心ない仕業を何うする。——お米の羽織に、然うして、墓の姿を隠して好かつた。花やかともいへよう、ものに激した舉動の、此のしつとりした女房の人柄に似ない捷い仕種の思掛けなさを、辻町は怪しまず、然もありさうな事と思つたのは、お京の娘だからであつた。こんな場に出逢つては、きつとおなじはからひをするに疑ひない。そのかはり、娘と違ひ、落着いたもので、澄まして羽織を脱ぎ、背負揚を棄て、悠然と帯を巖に解いて、あらはな長襦袢ばかりになつて、小袖ぐるみ墓に着せたに違ひない。

何、夏なら、炎天なら何とする？……と。然ういふ皮肉な讀者には弱る、が、言はねば卑怯らしい、裸體になります、然らずんば、辻町が裸體にされよう。

——其の墓へは先づ詣でた——

引返して来たのであつた。

辻町の何よりも早くこゝで爲よう心は、立處に繩を切つて棄てる事であつた。瞬時と雖も、人目に曝すに忍びない。行るとなれば手傳はう、お米の手を借りて解きほどきなどするのにも、二人の目さへ當てかねる。

さしあたり、ことわりもしないで、他の勞業を無にするといふ遠慮だが、その申譯と、渠等を納得させる手段は、酒と餅で、そんなに煩はしい事はない。手で招いても澁面の皺は伸びよう。また厨裡で心太を突くやうな跳梁權を獲得して居た、檀越夫人の嫡女がこゝに居るのである。

栗柿を剥く、庖丁、小刀、そんなものを借りるのに手間ひまはかゝらない。

大剪刀が、恰も蝙蝠の骨のやうに飛んで居た。

取つて構へて、些と勝手は悪い。が、繩目を見る目に忍びないから、衣を掛けた此のまゝ、留南奇を燻く、繪で見た伏籠を念しながら、もろ手を、づかと袖裏へ。驚破、ほんのりと、暖い。芬と薫つた、石の肌の軟かさ。

思はず、

「呀。」

と聲を立てたのであつた。

「——おばけの蜻蛉、をびさん。」

「——何そんなものの居よう筈はない。」

胸傍の小さな痣、この青い蘇、そのお米の乳のあたりへ鉄が響きさうだつたからである。辻町は一禮し、墓に向つて、屹といつた。

「お嬢さん、私の仕業が悪かつたら、手を、怪我をおさせなさい。」

鉄は爽やかな音を立てた、ちゝろも聲せず、松風を切つたのである。

「やあ、塗師屋様、——ご新姐。」

木戸から、寺男の皺面が、墓地下で口をあけて、もう喚き、冷めし草履の馴れたもので、これは確たる徑は踏まない。草土手を踏んで横ざまに、傍へ来た。

續いて日傭取が、おなじく木戸口へ、肩を組合つて低く出た。

「ごめんなせえましょ、お客様。……ご機嫌よくかうやつてござらつしやる處を見ると、間違え

「ごともなかつたの、何も、別條はなかつただね。」

「處が、おつさん、少々別條があるんですよ。きみたちの仕事を、一寸無駄にしたぜ。一杯買はう、これです、ぶつ／＼に繩を切拂つた。」

「はい、これは、はあ、い、事をさつせえて下さりました。」

「何だか、あべこべのやうな挨拶だな。」

「いんね、全くい、事をなさせました。」

「い、事をなさいましたぢやないわ、おいたはしいぢやないの、女藤さんがさ。」

「ご新姐、それがね、いや、この、からげ繩、畜生。」

其處で、踞んで、毛蟲を踏潰したやうな爪さきへ近く、切れて落ちた、むすびめの節立つた荒繩を手繰棄てに背後へ刎出しながら、きよろ／＼と樹の空を見廻した。

妙なもので、下木戸の日傭取たちも、申合せたやうに、揃つて、踞んで、空を見る目が、皆動く。

「い、鹽梅に、幽霊蜻蛉、消えただかな。」

「一體何だね、それは。」

「もの、それがでござりますよ、お客様、此の、はい、石塔を動かすにつきましただ。」

「いづれ、あの糸塚とかいふのについての事だらうが、何かね、掘返してお骨でも。」

「いや、それは成りましたねえ。記念碑發起押つぽだての、帽子、靴、洋服、袴、髻の生えた、ご連中さ、其のつもりであつたれど、寺の和尚様、承知さつしやりましたねえだ。ものこれ、三十年経つたところいへ、若い女藤が埋つてるだ。それに、久しい無縁墓だで、ことわりいふ檀家もなしの、立合つてくれる人の見分もないで、と一論判あつた上で、土には觸らねえ事になつたでがす。」

「然うあるべき處だよ。」

「處で、はい、あのさ、石彫の大え絲梓の上へ、がつしりと、立派なお堂を据ゑて戸をあけたてしますだね、その中へ此の……」

お米は着流しのお太鼓で、まことに優に立つて居る。

「お、成佛をさつしやるづら、しをらしい、嫁菜の花のお羽織きて、霧は紫の雲のやうだ、しなく／＼としてや。」

と、苔の生えたやうな手で撫でた。

「あ、揆つたい。」

「何でがすい。」

と、何も知らず、久助は墓の羽織を、もう一撫で。

「此の石塔を齋き込むくろみだ。その堂がもう出来て、切組みも済ましたで、持込んで寸法をきつちり合はす段が、はい、こゝは此の通り足場が悪いと、山門内まで運ぶについて、今日さ、此の運び手間だよ。肩がはりの念入りで、丸太棒で擔ぎ出しますに。——丸太棒めら、丸太棒を押立てて、ごらうじませい、彼處にとぐるを巻いて居ますだ。あのさきへ矢羽根をつけると、掘立普請の齋が出るだね。へい、墓場の入口だ、地獄の門番……はて、飛んでもねえ、肉親のご新姐ござらつしやる。」

と、泥でまぶしさうに、口の端を拳でおさへて、

「——そのさ、擔ぎ出しますに、石の直肌を繩を掛けるで、藁なり蓆なりの、花ものの草木を雪圍ひにしますだね、あの骨法でなくば悪かんべいと、お客様の前だけんど、わし一應はいうたれども、丸太棒めら。あに、はい、墓さ苞入に及ぶもんか、手間障だ。また誰も見て居ねえで、構ひごとねえだ、と吐いての。」

和尚様は今日は留守なり、お納所、小僧も、總齋に出さした。まづ大事ねえでの。はい、ぐる／＼まきのがんじがらみ、や、このしよで、轉がし出した。それさ、其の形でがすよ。わしさ屈腰で、膝はだかつて、面を突出す。奴等三方からかぶさりかゝつて、棒を突挿さうと思

はつせえまし。何と、此の鼻の先、奴等の目の前へ、繩目へ浮いて、羽さ弾いて、赤蜻蛉が二つ出た。

たつた今や、それまでといふものは、四人八ツの、團栗目に、糠蟲一疋入らなんだに、かけた繩さ下から潜つて石から湧いて出たは何うしたもんだね。やあく、しつ／＼、吹くやら、拂ひますやら、静として赤蜻蛉が動かねえとなると、はい、時代違ひで、何の氣もねえ若い徒も、さて此の働きに掛つて見れば、記念碑糸塚の因縁さ、よく聞いて知つてるもんだで。

ほれ、のろ／＼と此方さ寄つて来るだ。あの、さきへ立つて、丸太棒をついた、それ手拭をだらりと首へかけた、遅い男でがす。奴が、女藤の幽霊でねえか。出たツと、また髻どのが叫ぶと蜻蛉がひらりと動くと、くわつと二つ、灸のやうな炎が立つ。冷い火を汗に浴びると、うら山おろしの風さ眞黒に、どつと來た、煙の中を、目が眩んで遁げたでござえますすでの。……

それですがすもの、ご新姐、お客様。」

「それぢや、私たちが差出した事は、叱言なしに済むんだね。」

「ほつてもねえ、いゝ人扶けて下せえましたよ。時に、はい、和尚様歸つて、逢はつせえても、萬々沙汰なしに頼みますだ。」

其處へ、丸太棒が、のつそり來た。

「俺だつて、出来ねえ事はなかつたい、遠慮をした、えい、誰に。」
 と、お米を見返つて、ニヤリとして、麥藁が後に續いた。

「えらいぞ、權太、怪我をするな。」
 と、髻が小走りに、土手の方から後へ下りる。
 「俺だつて、出来ねえ事はなかつたい、遠慮をした、えい、誰に。」
 と、お米を見返つて、ニヤリとして、麥藁が後に續いた。

「かまひませんわ。」
 「構はねえたつて。これ、縛るとなると。」
 「うつくしいお方が、見てる前で、むざとなあ。」
 麥藁と、不精髻が目を見合つて、半ば呟くが如くにいふ。
 「いゝんですよ、構ひませんから。」

「よし、石も婉軟だらう。きれいなご新姐を抱くと思へ。」
 この時、丸太棒が鐵のやうに見えた。ぶる／＼と腕に力の漲つた逞しいのが、
 「よし、石も婉軟だらう。きれいなご新姐を抱くと思へ。」
 といふまゝに、頸の手拭が眞額でピンと反ると、棒をハタと投げ、つかと諸手を幕にかけた。
 袖の撓ふを胸へ取つた、前抱きにぬつと立ち、腰を張つて土手を下りた。此の方が掛り勝手が
 いらしい。巖路へ踏みはだかるやうに足を擴げ、タタと總身に動搖を加れて、大きな蟹が龍宮の
 女房を胸に抱いて逆落しの瀧に乗るやうに、づづづづと下りて行く。
 「えらいぞ、權太、怪我をするな。」
 と、髻が小走りに、土手の方から後へ下りる。
 「俺だつて、出来ねえ事はなかつたい、遠慮をした、えい、誰に。」
 と、お米を見返つて、ニヤリとして、麥藁が後に續いた。

「頓生菩提。……小川へ流すか、燃しますべし。」
さういつて久助が、掻き集めた繩の屑を、一束ねに握つて腰を擡げた時は、三人はもう木戸を出て見えなかつたのである。

「久……爺や、爺やさん、羽織はね。式臺へはふり込んで置いて可いんですよ。」
この羽織が、黒塗の華頭窓に掛つて居て、其の窓際の机に向つて、お米は細りと坐つて居た。冬の日には釣瓶おとしといふより、梢の熟柿を磔に打つて、もう暮れて、客殿の廣い疊が皆暗い。こんなにも、清らかなものかと思ふ、お米の頸を差覗くやうにしながら、盆に澁茶は出したが、火を置かぬ火鉢越しに且の机の上の提灯を視た。

「——この、提灯が出ないと、ご迷惑でも話が濟まない——」
信仰に頒布する、當山、本尊のお札を捧げた三寶を傍に、硯箱を控へて、硯の朱の方に筆を染めつつ、お米は提灯に瞳を凝らして、眉を描くやうに染めて居る。

「——屹と思ひついた、初路さんの糸塚に手向けて歸らう。赤蜻蛉——尾を銜へたのを是非頼む。塗師屋さんの内儀でも、女學校の出ぢやないか。繪といふと面倒だから圖畫で行くのさ。紅を引いて、二つなられば、羽子の羽でもい。胡蘿蔔を織に松葉をさしても、形は似ます。指で扱んだ唐辛子でも構はない。——」

と、たそがれの立籠めて一際漆のやうな板敷を、お米の白い足袋の傳ふ時、唆かして口説いた。北辰妙見菩薩を拜んで、客殿へ退く間であつたが。

水をたつぷりと注して、一寸口で吸つて、苔の唇をぼつつり黒く、八枚の羽を薄墨で、しかし丹念にあしらつた。瀬戸の水入が澁のついた鯉だつたのは、誂へたやうである。

「出来た、見事々々。お米坊、机に然うやつた處は、赤繪の紫式部だね。」

「知らない、おつかさんにいひつけて叱らせてあげるから。」

「失禮。」

と、茶碗が、また、赤繪だつたので、思はず失言を詫びつつ、準藤原女史に介添してお掛け申す……羽織を取入れたが、窓あかりに、

「これは、大分うらに青苔がついた。悪いなあ。た、んで持つか。」

と、持つたのに、それにお米が手を添へて、

「着ますわ。」

「きられるかい、暮のを、其のま。」

「おかはいさうな方のですもの、これ、葱摺ですよ。」
その優しさに、思はず胸がときめいて。

「肩を此方へ。」

「まあ、をぢさん。」

「おつかさんの名代だ、娘に着せるのに仔細ない。」

「はい、……どうぞ。」

くるりと向きかはると、思ひがけず、辻町の胸にヒヤリと髪をつけたのである。

「私、こひしい、おつかさん。」

前刻から——辻町は、演藝、映畫、そんなものの樂屋に縁がある——ほんの少々だけれども、

これは筋にして稼げると、潜に悪心の萌したのが、この時、色も、慾も何にもない、しみじみ、いとしくて涙ぐんだ。

「へい。お待遠でござりました。」

片手に蠟燭を、ちらく、片手に少しばかり火を入れた十能を持つて、婆さんが庫裏から出た。「糸塚さんへ置いて行きます、あとで氣をつけて下さいませよ、鳥が火を銜へるといひますから。」

お米も、式臺へもうかゝつた。

「へい、もう、刻限で、危氣はござりませぬえ、嘴太鳥も、嘴細鳥も、千羽ヶ淵の森へ行んで寢

ました。」

大城下は、目の下に、町の燈は、柳にとまれ、川に流る。磴を下へ、谷の暗いやうに下りた。

場末の五燈はまだ來ない。

あきなひ歸りの豆腐屋が、ぶつかるやうに、ハタと留つた時、

「あれ、蜻蛉が。」

お米が膝をついて、手を合せた。

あの墓石を寄せかけた、塚の絲梓の柄にかけて下山した、提灯が、山門へ出て、すこしづゝ高くなり、裏山の風一通り、赤蜻蛉が静と動いて、女の影が……二人見えた。

遺稿

この無題の小説は、泉先生逝去後、机邊の篋底に、夫人の見出されしものにして、いつ頃書かれしものか、これにて完結のものか、はたまた未完結のものか、今はあきらかにする術なきものなり。昭和十四年七月號中央公論掲載の、「縷紅新草」は、先生の生前發表せられし最後のものにして、その完成に盡されし努力は既に疾を内に潜めたる先生の肉體をいたむる事深く、其後再び机に對はれしこと無かりしといふ。果して然らばこの無題の小説は「縷紅新草」以前のものとするを至當とすべし。原稿は稍古びたる半紙に筆と墨をもつて書かれり。紙の古きは大正六年はじめて萬年筆を使用されし以前に購はれしものを偶々引出して用ひられしものと覺しく、墨色は未だ新しくして此の作の近き頃のものたる事を證す。主人公の名の糸七は「縷紅新草」のそれとひとしく、點景に赤蜻蛉のあらはる、事も亦相似たり。「どうもかう怠けてゐてはしかたが無いから、春になつたら少し稼がうと思つてゐます。」と先生の私に語られしは昨年の暮の事なりき。恐らく此の無題の小説は今年のはじめに起稿されしものにはあらざるか。

雑誌社としては無題を迷惑がる事察するにあまりあれど、さりとて他人がみだりに命題すべき筋合にあらざるを以て、強て其のまゝ掲出すべきことを希望せり。(水上瀧太郎附記)

伊豆の修禪寺の奥の院は、いろは假名四十七、道しるべの石碑を嚙、山の根、村口に數へて、ざつと一里餘りだと言ふ、第一のいの碑はたしか其の御寺の正面、虎溪橋に向つた石段の傍にあると思ふ……ろはと數へて道順にのあたりが俗に釣橋釣橋と言つて、渡ると小學校がある、が、それを渡らずに右へ廻るとほの碑に續く、何だか大根畠から首をもたげて指示しをするやうだけれど、此のお話に一吋要があるので、頼被をはづして申して置く。

もう温泉場からその釣橋へ行く道の半ばからは、一方が小山の裾、左が小流を間にして、田畑に成る、橋向ふへ廻ると、山の裾は山の裾、田畑は田畑それなりの道續きが、大畝りして向ふに小さな土橋の見えるあたりから、自から靜かな寂しい參拜道となつて、次第に俗地を遠ざかる思ひが起るのである。

稿 遺
土地では弘法様のお祭、お祭といつて居るが春秋二季の大式日、月々の命日は知らず、不斷、この奥の院は、長々と螺線をゆるく田畝の上に繞らした、處々、萱薄、草草の茂みに立つたしるべの石碑を、杖笠を棄て、イんだ順禮、道しやの姿に見せる、それとても行くとも販るともなく、突然として獨り佇むばかりで、往來の人は殆どない。

またそれだけに、奥の院は幽邃森嚴である。曠道を桂川の上流に辿ると、迫る處怪石巨巖の磊磊たるはもとより古木大樹千年古き、楠槐の幹も根も其のまゝ大巖に化したやうなのが曇々と立聳えて、忽ち石門砦高く、無齋式、不精進の、わけては、病身たりとも、がたくり、ふら／＼と道わるを自動車にふんぞつて來た奴等を、目さへ切塞いだかと驚かれる、が、慈救の橋は、易々と欄干つきで、靜に平かな境内へ、通行を許さる。

下車は言ふまでもなからう。

御堂は颯と松風よりも杉の香檜の香の清々しい森森とした樹立の中に、青龍の背をさながらの石段の上に玉面の獅子頭の如く築かれて、背後の大碧巖より一筋水晶の瀧が杖を鳴らして垂直に落ちて仰ぐも尊い。

境内わきの、左手の庵室、障子を閉して、……たゞ、假に差置いたやうな庵ながら構は縁が高い、端近に三寶を二つ置いて、一つには横綴の帳一冊、一つには奉納の米袋、ばら／＼と少しこぼれて、おひねりといふのが捧げてある、真中に硯箱が出て、朱書が添へてある。これは、俗名と戒名と、現當過去、未來、志す處の差によつて、おもひ／＼に其の姓氏佛號を記すのであらう。「お札を頂きます。」

——お札は、それは米袋に添へて三寶に調へてある、其のまゝでもよかつたらうが、もうやが

て近い……年頭御慶の客に對する、近來流行の、式臺は惡冷く外套を脱ぐと嚏が出さうなのに御内證は煖爐のぬくもりにエヘンとも言はず、……蒔繪の名札受が出て居るのは些と勝手が違ふやうだから——私ども夫婦と、もう一人の若い方、と云つて三十を越えた娘……分か？女房の義理の姪、娘が縁づいたさきの舅の叔母の從弟の子で面倒だけれど、姉妹分の娘だから義理の姪、どうも事實のありのまゝにいふとなると説明は止むを得ない。とに角、若いから紅氣がある、長襦袢の襟がすれりと、縁が高いから草履を釣られ氣味に伸上つて、

「ごめん下さいまし。」

すぐに返事のない處へ、小肥りだけれど氣が早いから、三寶越に、眉で覗くやうに手を伸ばして障子腰を細目に開けた。

山氣は翠に滴つて、詣づるもの、袖は墨染のやうだのに、向つた背戸庭は、一杯の日あたりの、ほか／＼とした裏縁の障子の開いた壁際は、留守居かと思ふ質素な老僧が、小机に對ひ、つぐなんで、うつしものか、かきものをしてござつた。

「ごめん下さいまし、お札を頂きます。」

遺稿 黒い前髪、白い顔が這ふばかり低く出たのを、蛇體と眉も擧めたまはず、目金越の睫の皺が、日南にとろりと些と伸びて、

「あゝ、お札はの、御随意にの頂かつしやつてようござるよ。」
と膝も頭も聲も圓い。

「はい。」

と、立直つて、襟の下へ一寸端を見せてお札を受けた、が、老僧と机ばかり圓光の裡の日だまりで、あたりは森閑した、人氣のないのに、何故か心を引かれたらしい。

「あの、あなた。」

かうした場所だ、對手は弘法様の化身かも知れないのに、馴々しいことをいふ。

「お一人でございますか。」

「おゝ、留守番の隠居爺ぢや。」

「唯たお一人。」

「さればの。」

「お寂しいでせうね、こんな處にお一人きり。」

「いや、お堂裏へは、近い頃まで猿どもが出て來ました、それはもう見えぬがの、日和さへよければ、此の背戸へ山鳥が二羽づゝ遊びに來ますで、それも友になる、それ。」

目金がのんどりと、日に半面に庭の方へ傾いて、

「巖の根の木瓜の中に、今もの、來て居ますわ。これぢや寂しいとは思ひませぬぢや。」
「はア。」

と息とゝもに娘分は胸を引いた、で、何だか考へるやうな顔をしたが、「山鳥がお友だち、洒落てるわねえ。」と下向の橋を渡りながら言つた、——「洒落てるわねえ」では困る、罪障の深い女性
は、こゝに至つてもこれを聞いても尼にもならない。

どころでない、宿へ皈ると、晩餉の卓子臺もやひ、一銚子の相伴、二つ三つで、赤くなつて、
あゝ、紅木瓜になつた、と頬邊を壓へながら、山鳥の旦那様はい、男か知ら。いや、尼處か、この
くらの悟り得ない事はない。「お日和で、坊さんはお友だちでよかつたけれど、番傘はお茶を引
きましたわ。」と言つた。

出掛けに、實は春の末だが、そちこち梅雨入模様で、時々氣まぐれに、白い雲が薄墨の影を流
してばら／＼と掛る。其處で自動車の中へ番傘を二本まで、奥の院御參詣結縁のため、「御縁日だ
と此の下で飴を賣る奴だね、」「へへへ、お土産をどうぞ。」と世馴れた番頭が眞新しい油もまだ白
いのを、ばり／＼と綴粹をはづして入れた。

稿 遺 贅澤を云つては悪いが、此の暖さと、長閑さの眞中には一降り來たらばと思つた。路近い農家
の背戸に牡丹の緋に咲いて葎の香に黄色い雲の色を湛へたのに、舞ふ蝶の羽袖のびの影が、佛前

に捧ぐる妙なる白い手に見える。遠方の小さい幽な茅屋を包んだ一むら竹の奥深く、山はその麓なりに咲込んだ映山紅に且つ半ば濃い陽炎のかゝつたのも里親しき護摩の燃ゆる姿であつた。傘さして此の牡丹にイミ、すぼめて、あの竹藪を分けたらばと詣づる道すがら思つたのである。

土手には田芹、露が満ちて、蒲公英はまだ盛りに、目に幻のあの白い小さな車が自動車の輪に競つて飛んだ。いま、その販りがけを道草を、策に洗つて、縁に近く晩の卓子臺を圍んで居たが、

——番傘がお茶を引いた——

おもしろい。

悟つて尼に成らない事は、凡そ女人以上の糸七であるから、折しも欄干越の桂川の流をたゞいで、ざつと降出した雨に氣競つて、

「おもしろい、其の番傘にお茶をひかすな。」

宿つきの運轉手の馴染なもの、ちやうど帳場に居はせた。

九時頃であつた。

「さつきの番傘の新造を二人……どうぞ。」

「は、お楽しみで……」

番頭の八方無碍の會釋をして、其の眞新しいのを又運轉手の傍へ立掛けた。

しばらくして、此の傘を、さら／＼と降る雨に薄白く暗夜にさして、女たちは袖を合せ糸七が一人立ちで一畝の水田を前にしてイんだ處は、今しがた大根畑から首を出して指しをした奥の院道の土橋を遙に見る——一方は例の釣橋から、一方は鳶の嘴のやうに上へ被さつた山の端を潜つて、奥在所へさながら谷のやうに深く入る——俗に三方、また信仰の道に因んで三寶ヶ辻と呼ぶ場所である。

——衝き進むエンジンの音に鳴留んだけれども、眞上に突出た山の端に、ふアツふアツと、山臥がうつむけに息を吹掛けるやうな梟の聲を聞くと、女連は眞暗な奥在所へ入るのを可厭がつた。元來宿を出る時この二人は温泉街の夜店飾りの濡灯色と、一寸野道で途絶えても殆ど町續きに齊しい停車場あたりの靄の燈を望んだのを、番傘を敲かぬばかり糸七が反對に、もの寂しいいろはの碑を、辿つたのであつたから。

それでは、もう一方奥へ入つてから其の土橋に向ふとすると、餘程の暇を抜けなければ、車を返す足場がない。

三寶ヶ辻で下りたのである。

「あら、こんな處で。」

稿 遺 「番傘の情人に逢はせるんだよ。」

「情人ツて？番傘の。」

「蛙だよ、いゝ聲で一面に鳴いてるぢやないか。」

「まあ、風流。」

さ、さ、その風流と言はれるのが可厭さに、番傘を道具に使つた。第一、雨の中に、立つた形は、うしろの山際に柳はないが、小野道風何とか硯を悪く趣向にしたちんどん屋の稽古をすると思はれては、いひやうは些とぞんざいだが……ごめんを被つて……癩に障る。

糸七は小兒のうちから、妙に、見ることも、聞くことも、ぞつこん蛙といへば好きなのである。小學最初級の友だちの、——現今は貴族院議員なり人の知つた商豪だが——邸が侍町にあつて、背戸の蓮池で飯粒で蛙を釣る、釣れるとも、目をばちくとやつて、腹をぶくくと膨ます、と云ふのを聞くと、氏神の境内まで飛ばないと、蜻蛉さへ易くは見られない、雪國の城下でもせ、こましい町家に育つたものは、瑠璃の丁斑魚、珊瑚の鯉、五色の鮒が泳ぐとも聞かないのに、池を蓬萊の嶋に望んで、青蛙を釣る友だちは、寶貝のかくれ蓑を着て、白銀の糸を操るかと思つた。學問半端にして、親がなくなつて、東京から一度田舎へ返つて、朝夕のたつきにも途方に暮れた事がある。

「あゝ、よく鳴いてるなあ。」

城下優しい大川の土手の……松に添ふ片側町の裏へ入ると廢敗した潰れ屋のあとが町中に、棄苗の水田に成つた、その田の名には稱へないが、其處をこだまの小路といふ、小玉といふの、家跡か、白晝も寂然として居て餌をするか、濁つて呼ぶから女の名ではあるまいが、おなじ名のきれいな、あはれな婦がこゝで自殺をしたと傳へて、のちの今も尙ほ、その手提灯が闇夜に往來をするといつた、螢がまた、こゝに不思議に夥多しい。

が、提灯の風説に消されて見る人の影も映さぬ。勿論、蛙など聞きに出掛けるものはない。……世の暗さは五月闇さながらで、腹のすいた少年の身にして夜の灯でも繁華な巷は目がくらむで瘦脛も振れるから、こんな處を便つては立樹に凭れて、固からの耕地でない證には破垣のまばらに残つた水田を熟と闇夜に透かすと、鳴くわ、鳴くわ、好きな蛙どもが裝上つて浮かれて唱ふ、そこには見えぬ花菖蒲、杜若、河骨も卵の花も誘はれて來て踊りさうである。

此處だ。

「よく、鳴いてるなあ。」

世にある人でも、歌人でも、こゝまでは變りはあるまい、が、情ない事には、すぐあとへ、
「あゝ、嚙ぞお腹がいゝだらう。」
——さだめしお飯をふんだんに食つたらう——ても情ない事をいふ——と、喜多八がさもしがる。

……三嶋の宿で護摩の灰に胴巻を抜かれたあとの、あはれはこゝに彌次郎兵衛、のます、くはすのます、竹杖にひよろ／＼と海道を辿りながら、飛脚が威勢よく飛ぶのを見て、其の満腹を羨んだと思ひは齊しい。……又膝栗毛で下司ばる、と思召しも恥かしいが、こんな場合には繪言葉卷ものや、哲理、科學の横綴では間に合はない。

生芋の欠片さへ芋屋の小母さんが無代では見向きもしない時は、人間よりはまだ氣の知れない化もの、方に幾分か憑頼がある、姑獲女を知らずや、嬰兒を抱かされても力餅が慾しいのだし、ひだるさにのめりさうでも、金平式の武勇傳で、劍術は心得たから、糸七は、其處に小提灯の幽靈の怖れはなかつた。

奇異ともいはず、一寸微妙なまはり合せがある。これは、ざつと十年も後の事で、糸七もいくらか稼げる、東京で些かながら業を得た家業だから雑誌お誂への隨筆のやうで、一度話した覚えがある。やゝ年下だけれど心置かれぬ友だちに、——^原ようから、本名俳名も——谷活東といふのが居た。

作意で略其の人となりも知れよう、うまれば向嶋小梅業平橋邊の家持の若旦那が、心がらとて俳三昧に落魄れて、牛込山吹町の割長屋、薄暗く戸を鎖し、夜なか洋燈をつける處か、身體にも

油を切らして居た。

昔から恠うした男には得てつきもの、戀がある。最も戀をするだけなら誰がしようとお隨意で何處からも槍は出ない。許嫁の打壞れだとか、三社様の祭禮に見初めたとかいふ娘が、柳橋で藝妓をして居た。

さて、其の色にも活計にも、寐起にも夜晝の區別のない、迷晦朦朧として黄昏男と言はれても、江戸兒だ、大氣なもので、手ぶらで柳橋の館——いや館は上方——何とか家へ推參する。その藝しやの名を小玉といつた。

借りたか、攫つたか未だ審ならずであるが、本望だといふのに、絹糸のやうな春雨でも、襦袢もなしに素裕の膚薄な、と畜生め、何でもといつて貸してくれた、と番傘に柳ばしと筆ぶとに打つけたのを、友だち中へ見せびらかすのが晴曇りにかゝはらない。況や待望の雨となると、長屋近間の茗荷畠や、水車なんぞでは氣分が出ないとまだ古のまゝだつた番町へにして清水谷へ入り擬寶珠のついた辨慶橋で、一振柳を胸にたぐつて、ギクリと成つて……あゝ、逢ひたい。顔が見たい。

其の邊の蛙の聲が、皆こたまだ、こたまだ、と鳴くといふのである。

唯、糸七の遠い雪國の其の小提灯の幽靈の徜徉ふ場所が小玉小路、斷然話によそへて拵へたのではない、とすると、蛙に因んで顯著なる奇遇である。かたり草、言の花は、蝶、鳥の翼、嘴には限らない、其の種子は、地を飛び、空をめぐつて、いつ其の實を結ぼうも知れないのである。——此なども、道芝、仇花の露にも過ぎない、實を結ぶまではなくても、幽な葉を装ひ儂い色を彩つて居る、たゞし其にさへ少からぬ時を経た。

明けていふと、活東の其の柳橋の番傘を隨筆に撰んだ時は、——其以前、糸七が小玉小路で蛙の聲を聞いてから、ものゝ三十年あまりを経て居たが、胸の何處に潜み、心の何處にかくれたか、翼なく嘴なく、色なく影なき話の種子は、小机からも、硯からも、其の形を顯はさなかつた、まるで消えたやうに忘れて居た。

それを、其の折から尙ほ十四五年のち、修禪寺の奥の院路三寶ヶ辻に亘んで、蛙を聞きながら、ふと思出した次第なのである。

悠久なるかな、人心の小さき花。

あゝ、悠久なる……

そんな事をいつたつて、わかるやうな女連ではない。

「——一つ此の傘を廻はして見ようか。」

糸七は雨のなかで、——柳橋を粗と話したのである。

「今いつた活東が辨慶橋でやつたやうに。」

「およしなさい、澤山。」

と女房が聲ばかりでたしなめた。田の縁に並んだが中に娘分が居ると、もうその顔が見えないほど暗かつた。

「でも、妙ね、然ういへば……何ですつて、蛙の聲が、其の方には、こがれる女の小玉だ、小玉だと聞こえたんですつて、こたまだ。あら、眞個だ、串戯ぢやないわ、叔母さん、こたまだ、こたまだツて鳴いてるわね、中でも大きな聲なのねえ、叔母さん。」

「まつたくさ、私をかしいと思つて居るほどなんだよ、氣の所爲だわね、……氣の所爲といへば、新ちゃんどう、あの一齊に鳴く聲が、活東さんといやしな……」

かつと、かつと、

かつと、……

稿

遺 それ、揃つて、皆して……」

「むゝ、聞こえる、——かつと、かつと——か、然ういへば。——成程これはおもしろい。」

女房のいふことなどは滅多に應といつた事のない奴が、これでは濟むまい、蛙の聲を小玉小路で羨んだ、その昔の空腹を忘却して、圖に乗氣味に、田の縁へ、ぐつと踞んで聞込む氣で、いきなり腰を落しかけると、うしろ斜めに肩を並べて廂の端を借りて居た運轉手の帽子を傘で敲いて驚いたのである。

「あゝ、これは何うも。」

其の癖、はじめは運轉手が、……道案内の任がある、且つは婦連のために頭に近い梟の魔除の爲に、降るのに故と臺から出て、自動車に引添つて頭から黒扮装の細身に腕を組んだ、一寸探偵小説のやみじあひの挿繪に似た形で屹としてゐんで居たものを、暗夜の曖の寂しさに、女連が世辭を言つて、身近におびき寄せたものであつた。

「ごめんなさい、熊澤さん。」

こんな時の、名も頼もしい運轉手に娘の方が——其のかはり糸七のために詫をいつて、

「ね、小玉だ、小玉だ、……かつと、かつと……叔母さんのいふやうに聞こえるわね。」

「蛙なかまも、いづれ、さかり時の色事でございませう、よく鳴きますな、調子に乗つて、波を立て、鳴きますな、星が降ると言ひますが、あの聲をたゞく雨は花片の音がします。」

月があると、晝間見た、畝に咲いた牡丹の影が、こゝへ重つて映るであらう。

「旦那。」

「……………」

妙に改つた聲で、

「提灯が來ますな——むかふから提灯ですね。」

「人通りがあるね。」

「今時分、やつぱり在方の人でせうね。」

娘分のいふのに、女房は黙つて見た。

温泉の町入口はづれと言つてもよからう、もう、あの釣橋よりも此方へ、土を二三尺離れて一つ灯れて來るのであるが、女連ばかりとは言ふまい、糸七にしても、これは、はじめ心着いたのが土地のもので様子の分つた運轉手で先づ可かつた、然うでない、いきなり目の前へ梟の腹で鬼火が燃えたやうに怯えたかも知れない。……見える其の提灯が、むく／＼と灯れ据つて、いびつに大い。……軒へ立てる高張は御存じの事と思ふ、やがて其のくらのだけども、夜の曖のこんな時に、唯ばかりでは言ひ足りない。たとへば、翳して居る雨の番傘をばさりと半分^原に切つて、やゝふくらみを繼足したと思へばいゝ。

稿 遺 樹蔭の加減か、雲が低いのか、水濛が深いのか、持つて居るものゝ影さへなくて、其の^原提灯

ばかり。

つらつら／＼と、動くのに濡色が薄油に、ほの白く艶を取つて、降りそゞ雨を露に散らして、細いしぶきを立てると、その飛ぶ露の光るやうな片輪にもう一つ宙にふうわりと仄あかりの輪を大きく提灯の形に巻いて、且つ其のづぶ濡の色を一息原に一息に熟と撓めながら、風も添はずに寄つて来る。

姿が華奢だと、女一人くらゐは影法師にして倒に吸込みさうな提灯の大きさだから、一寸皆聲を啖んだ。

「田の水が茫と映ります、あの明だと、縞だの斑だの、赤いのも居ますか、蛙の形が顯はれて見えませうな。」

運轉手がいふほど間近になつた。同時に自動車が寐て居る大な牛のやうに、其の灯影を遮つたと思ふと、スツと提灯が縮まつて普通の手提に小さくなつた。汽車が、其の眞似をする古狸を、線路で轢殺したといふ話が僻地にはいくらもある。文化が妖怪を滅するのである。が、すなほに思へば、何かの都合で圖抜けに大きく見えた持手が、吃驚した拍子にもとの姿を顯はしたのであらう。

「南無、觀世音……」

打念じたる、これを聞かれよ。……村方の人らしい、鳴きながらの蛙よりは、泥鼈を抱いて居さうな、雫の垂る、雨蓑を深く着た、蓑だといつて、すぐに笠とは限らない、古帽子だか手拭だか煤けですつぱりと頭を包んだから目鼻も分らず、雨脚は濁らぬが古ぼけた形で一濡れになつて顯はれたのが、——道巾は狭い、身近な女二人に擦違はうとして、ぎよツとしたやうに退ると立直つて提灯を持直した。

音を潜めたやうに、蹺音を立てずに山際について其のまゝ行過ぎるのかと思ふと、ひつたりと寄つて、運轉手の肩越しに糸七の横顔へ提灯を突出した。

蛙かと思ふ目が二つ、くるツと映つた。

すぐに、もとへ返して、今度は向ふ廻りに、娘分の顔へ提灯を上げた。

爾時である、菩薩の名を唱へたのは——

「南無觀世音。」

續けて又唱へた。

「南無觀世音……」

遺稿 この耳近な聲に、娘分は湯上りに化粧した頸を垂れ、前髪でうつむいた、その白粉の香の雨に傳ふ白い顔に、一條ほんのりと紅を薄くさしたのは、近々と蓑の手の寄せた提灯の——模様かと

見た——朱の映つたのである、……あとで聞くと、朱で、かなだ、「こんばんは」と記したのであつた。

このまざくと口を聞くが、聲のない挨拶には誰も口へ出して會釋を返す機を得なかつたが、菩薩の稱號に、其の娘分に續いて、糸七の女房も掌を合はせた。

「南無觀世音……」

又繰返しながら、蓑の下の提灯は、洞の口へ吸はるゝ如く、奥在所の口を見るうちに深く入つて、肩から裾へすばまつて、消えた。

「まるで嘲笑ふやうでしたな、歸りがけに、又あの梟めが、まだ鳴いて居ます——爺い……老爺らしいございましたぜ。……爺も驚きましたらう、何しろ思ひがけない雨のやみに第一ご婦人です……氣味の悪さに爺もお慈悲を願つたでせうが、觀音様のお庇で、此方が助かりました、……一息冷汗になりました。」

するゝと車は早い。

「觀音様は——男ですか、女で居らつしやるんでございますか。」
響の應ずる如く、

「何とも言へない、うつくしい女のお姿ですわ。」

と、淺草寺の月々のお茶湯目を、やがて満願に近く、三年の間一度も缺かさなぬ姪がいつた。

「まつたく、然うなんでございますか、旦那。」

「それは、その、何だね……」

いゝ鹽梅に、車は、雨もふりやんだ、青葉の陰の濡色の柱の薄り青い、つゝじのあかるい旅館の玄関へ入つたのである。

出迎へて口々にお飯んなさいましをいふのに答へて、糸七が、

「唯今、夜遊の番傘が販りました——熊澤さん、今のはだね、修禪寺の然るべき坊さんに聞きたまへ。」

天狗の火、魔の燈——いや、雨の夜の噺で不思議な大きな提灯を視たからと言つて敢て圖に乗つて、妖怪を語らうとするのではない、却つて、偶然の或場合には其が普通の影象らしい事を知つて、糸七は一先づ讀しやと、もに安心をしたいと思ふのである。

遺稿
まるゝ、著名の碩學、南方熊楠氏の隨筆を見ると、其の龍燈に就て、と云ふ一章の中に、おなじ紀州田邊の絲川恒太夫といふ老人、中年まで毎度野諸村を行商した、秋の末らしい……一夜、新鹿

村の湊に宿る、此の湊の川上に浅谷と稱ふるのがある、それと並んで二木嶋、片村、曾根と谿谷が續く二谷の間を、古來天狗道と呼んで少からず人の懼るゝ處である。時に絲川老人の宿つた夜は恰も樹木挫折れ、屋根廂の摧飛ばむとする大風雨であつた、宿の主とても老夫婦で、客とも、もに揺れ撓む柱を抱き、僅に板形の残つた天井下の三疊ばかりに立籠つた、と聞くさへ、……わけて熊野の僻村らしい……其の佗しさが思遣られる。唯、こゝに同郡羽鳥に住む老人の一人の甥、茶の木原に住む、其の従弟を誘ひ、素裸に腹帯を緊めて、途中川二つ渡つて、伯父夫婦を見舞に來た、宿に着いたのは眞夜中二時だ、と聞くさへ、其の膽勇殆ど人間の類でない、が、暴風強雨如法の大闇黒中、かの二谷を呑むだ峯の上を、見るも大なる炬火甘ばかり、烈烈として連り行くを仰いで、おなじ大暴風雨に處する村人の一行と知りながら、かゝればこそ、天狗道の稱が起つたのであると悟つて話したといふ、が、或は云ふ處のネルモの火か。

なほ當の南方氏である、先年西牟婁郡安都ヶ峯下より坂泰の巔を踰え日高丹生川にて時を過ぎしすぎられたのを、案じて安堵の山小屋より深切に多人數で捜しに來た、人數の中に提灯唯一つ灯したのが同氏の目には、ふと炬火數十束一度に併せ燃したほどに大きく見えた、と記されて居る。然も嬉しい事には、談話に續けて、續膝栗毛善光寺道中に、落合峠のくらやみに、例の彌次郎兵衛、北八が、つれの獵夫の舌を縮めた天狗の話を、何だ鼻高、さあ出て見る、其の鼻を引撈

いで小鳥の餌を磨つてやらう、といふを待たず、獵夫の落した火繩忽ち大木の梢に飛上り、たつた今まで吸殻ほどの火だつたのが、また、くうちに松明の大きとなつて、枝も木の葉もざわ／＼と鳴つて燃上つたので、頭も足も獵師もろとも一縮み、生命ばかりはお助け、と心底から涙……が可笑しい、欄面屋と喜多利屋と、這個二人の呑氣ものが、一代のうちに唯一度であらうと思ふ……涙を流しつゝ、鼻高様に恐入つた、といふのが、いまの南方氏の隨筆に引いてある。

夜の燈火は、場所により、時とすると不思議の象を現はす事があるらしい。
幸に運轉手が獵師でなかつた、婦たちが眞先に梟の鳴聲に恐れた殊勝さだつたから、大きな提灯が無事に通つた。

が、例を引き、因を説き蒙を啓く、大人の見識を表はすのには、南方氏の説話を聽聞すること
が少しばかり後れたのである。

實は、怪を語れば怪至る、風説をすれば影がさす——先哲の識語に鑒みて、温泉宿には薄暗い長廊下が續く處、人の居ない百疊敷などがあるから、逗留中、取り出ては大提灯の怪を繰返して言出さなかつたし、東京に飯ればパツと皆消える……日記を出して話した處で、鉛筆の削屑ほども人が氣に留めさうな事でない、婦たちも、そんな事より釜の底の火移りで翌日のお天氣を占ぶ方が忙しいから、たゞ其のまゝになつて過ぎた。

稿 遺

翌年——それは秋の末である。糸七は同じ場所——三寶ヶ辻の夜目に同じ處におなじ提灯の顯はれたのを視た。——

……然うは言つても第一季節は違ふ、蛙の鳴く頃ではなし、それに爾時は女房ばかりが同伴の、それも宿に留守して、夜歩行をしたのは糸七一人だつたのである。

夕餉が少し晩くなつて済んだ、女房は一風呂入らうと云ふ、糸七は寐る前にと、その間をふらりと宿を出た、奥の院の道へ向つたが、

「まづ、御一名——今晚は。」

と道しるべの石碑に挨拶をする、微酔のい、機嫌……機嫌のい、のは、まだ一つ、上等の巻貫に火を點けた、勿論自費購求の品ではない、大連に居る友達が土産にくれたのが、素敵な薫りで一人其の香を聞くのが惜い、燐寸の燃えさしは路傍の小流に落したが、さらりと行く水の中へ、ツと音がして消えるのが耳についたほど四邊は静で。……あの釣橋、その三寶ヶ辻——一昨夜、例の提灯の暗くなつて隠れた山入の村を、とふと朧したが、今夜は素より降つては居ない、がさあ、幾日ぐらゐの月だらうか、薄曇りに唯茫として、暗くはないが月は見えない、星一つ影もささなかつた、風も吹かぬ。

煙草の薫が來たあとへも、ほんのりと残りさうで、袖にも匂ふ……たまさかに吸つてふツと吹

くのが、すらりと向ふへ靡くのに乗つて、暁のほの白いのを踏むともなしに、うか々と前途なる其の板橋を渡つた。

こ、で見た景色を忘れない、刈あとの稻田は二三尺、濃い霧に包まれて、見渡すかぎり、一面の朧の中に薄煙を敷いた道が、ゆるく、長く波形になつて遙々と何處までともなく奥の院の雲の果まで、遠く近く、一むらの樹立に絶えては續く。

その路筋を田の畔邊の左右に、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つと順々に數へるとふわりと霧に包まれて、ぼうと末消えたのが浮いて出たやうに又一つ二つ三つ四つ五つ、稻塚——其の稻塚が、ひよいくと、いや、實のあと、いへば氣は軽いけれども、夜氣に沈んだ薄墨の石燈籠の大きな蓋のやうに何處までも行儀よく並んだのが、中絶えがしつ、雲の底に姿の見えない、月にかけてた果知れぬ八ツ橋の狀に視められた。

四邊は、ものゝ、たゞ霧の朧である。

糸七は、然うした橋を渡つた處に、うっかり恍惚とイんだが、裾に近く流の音が沈んで聞こえる、その沈んだのが下から足を浮かすやうで、餘り靜かなのが心細くなつた。

遺稿
あの稻塚がむくくと動き出しはしないか、一つ一つ大きな笠を被た狸になつて、やがては誘ひ合ひ、頷きかはし、寄合つて手を繋ぎ、振向いて見返るのもあつて、けたくと笑出したら何

うだらう。……それはまだ與し易い。宿縁に因つて佛法を信じ、靈地を巡拜すると聞く、あの海豚の一群が野山の霧を泳いで順々に朦朧と列を整へて、ふかりふかりと浮いつ沈んつ音なく頭を進めるのに似て、稻塚の藁の形は一つ一つ其の頂いた幻の大な笠の趣がある。……

いや、串戯ではない、が、ふと、そんな事を思つたのも、餘り夜たゞ一色の底を、靜に揺つて動く流の音に漾はされて、心もうはの空になつたのであらう……と。

何も體裁を言ふには當らない、ぶちまけて言へば、馬鹿な、糸七は……狐狸とは言ふまい——あたりを海洋に變へた霧に魅まれさうに成つたのであらう、然うらしい……

で幽谷の蘭の如く、一人で聞いて居た、卷蓑を、其處から引返しざまに流に棄てると、眞紅な苔が消えるやうに、水までは届かず霧に吸はれたのを確と見た。が、すぐに踏掛けた橋の土はふわ／＼と柔かな氣がした。

それからである。

恠る折しも三寶ヶ辻で、又提灯に出會つた。

もとの三寶ヶ辻まで引返すと、丁どいつかの時と殆ど同じ處、その温泉の町から折曲一つ折れて奥の院參道へあらたまる釣橋の袂へ提灯がふうわりと灯も灰白んで顯はれた。糸七は立停つた。

忽然として、仁王が驚擱みにするほど大きな提灯に成らうも知れない。夜氣は——夜氣は略似て居るが、いま雨は降らない、けれども灯の角度が殆ど同じだから、當座仕込の南方學に教へられた處によれば、此の場合、偶然エルモの火を心して見る事が出來ようと思つたのである。

——違ふ、提灯が動かない霧に据つたまゝの趣ながら、靜にやゝ此方へ近づいたと思ふと、もう違ふも違ひすぎた——そんな、古蓑で頼被りをした親爺には似てもつかぬ。髪の毛艶々と黒いと、色のうつくしく白い顔が、丈だちすらりとして、ほんのり見える。

婦人が、いま時分、唯一人。

およそ、積つても知れるが、前刻、旅館を出てから今になるまで、糸七は人影にも逢はなかつた。成程、くらやみの底を抜けば村の地へ足は着かう。が、一里あまり奥の院まで、曠野の杜を飛々に心覚えの家数は六七軒と數へて十に足りない、この心細い渺漠たる霧の中を何處へ吸はれて行くのであらう。里馴れたものといへば、たゞ遙々と曠を奥下りに連つた稻塚の數ばかりであるのに。——然も村里の女性の風情では斷じてない。

霧は濡色の紗を掛けた、それを透いて、却つて柳の薄い朧に、霞んだ藍か、いや、淡い紫を掛けたやうな衣の彩織で、しつとりともう一枚羽織はおなじやうで、それよりも濃く黒いやうに見えた。

稿

えた。

時に、例の提灯である、それが膝のあたりだから、棲は消えた、而して、胸の帯が、空近くして猶且つ雲の底に隠れた月影が、其處にばかり映るやうに艶を消しながら白く光つた。

唯、こゝで言ふのは、言ふのさへ、餘り町じみるが、あの背負揚とか言ふものゝ、灯の加減で映るのだらうか、ちら／＼と……いや、霧が凝つたから、花片、緋の葉、然うは散らない、すつと細く、毛引の雁金を紅で描いたやうに提灯に映るのが、透通るばかり美しい。「今晚は。」

此の静寂さ、いきなり聲をかけて行違つたら、耳元で雷……は威がありすぎる、それこそ鼻が法螺を吹くほどに淑女を驚かさう、黙つてぬつと出たら、狸が泳ぐと思はれよう。こゝは動かないで居るに限る。

第一、あの提灯の小山のやうに明るくなるのを、熟として待つ筈だ。

糸七は、嘗て熱海にも兩三度入湯した事があつて、同地に知己の按摩がある。療治が達しやで、すこし目が見える、夜話が實に巧い、職からで夜戸出が多い、其のいろ／＼な話であるが、先づ水口園の前の野原の眞中で夜なかであつた、茫々とした草の中から、足もとへ、むく／＼と牛の突立つやうに起上つた大漢子が、いきなり鼻の先へ大きな握拳を突出した、「マッチねえか。」「身ぐるみ脱ぎます——あなたの前でございませうが。……何、此の界限トンネル工事の労働しやが、

酔拂つて寐ころがつて居た奴なんで。しかし、其の時は自分でも身に覺えて、ぐわたく／＼ぶるぶると震へましてな、へい。」まだある、新温泉の別荘へ療治に行つた賑りがけ、それが、眞夜中、時刻も丁ど丑満であつた、來の宮神社へ上り口、新温泉は神社の裏山に開けたから、賑り途の按摩さんには下口になる、隧道の中で、今時、何と、丑の時參詣にまざ／＼と出會つた。黒髪を長く肩を分けて蓬に捌いた、青白い、細面の婦が、白装束といつても、浴衣らしい、寒の中に唯一枚、糸粹に立てると聞いた蠟燭を、裸火で、それを左に灯して、右手に提げたのは鐵槌に違ひない。さて、藁人形と思ふのは白布で、小箱を包んだのを乳の下鳩尾へ首から釣した、頬へ亂れた捌髪が、其の白色を蛇のやうに這つたのが、あるくにつれて、ぬら／＼動くのが蠟燭の灯の揺れるのに映ると思ふと、その毛筋へぼたく／＼と血の滴るやうに見えたのは、約束の口に啣へた、その耳まで裂けるといふ梳櫛の然もそれが燃えるやうな朱塗であつた。いや、其の姿が眞の闇暗の隧道の天井を貫くばかり、行違つた時、すつくりと大きくなつて、目前を通る、白い跣足が宿の池にありませう、小さな船。あれへ、霜が降つたやうに見えた、「私は腰を抜かして、のめつたのです。あの釘を打込む時は、杉だか、樟だか、其の樹の梢へ其の青白い大きな顔が乗りませう。」

遣

といふのである。

稿——まだある、秋の末で、其の夜は網代の郷の舊大莊屋の内へ療治を頼まれた。旗櫻の名所の

ある山越の捷徑は、今は茅萱に埋もれて、人の往來は殆どない、伊東通ひ新道の、あの海岸を辿つて販つた、爾時も夜更であつた。
やがて二時か。

もう、網代の大莊屋を出た時から、途中松風と浪ばかり、路に落ちた緋い木の葉も動かない、月は皎々昭々として、磯際の巖も一つ一つ紫水晶のやうに見えて山際の雜樹が青い、穿いた下駄の古鼻緒も霜を置くかと白く冴えた。

……牡丹は持たねど越後の獅子は……いや、然うではない、嗜があつたら、何とか石橋でも口誦んだであらう、途中、目の下に細く白浪の糸を亂して崖に添つて橋を架けた處がある、其の崖には瀧が掛つて橋の下は淵になつた所がある、熱海から網代へ通る海岸の此處は謂はゞ絶所である。按摩さんが丁ど其の橋を渡りかゝると、浦添を曲る山の根に突出た巖膚に響いて、カラ／＼と、冴えた駒下駄の音が聞こえて、ふと此方の足の淀む間に、其の音が流れるやうに、もう近い、勘でも知れる、確に若い婦だと思ふと悚然とした。

寐鳥の羽音一つしない、かゝる眞夜中に若い婦が。按摩さんには、それ、嘗て丑の時詣のもの凄い経験がある、さうではなくても、いづれ一生懸命の婦にも突詰めた絶壁の場合だと思ふと、忽ち颯と殺氣を浴びて、あとへも前へも足が縮んだ、右へのめれば海へ轉がる、左へ轉べば淵へ

落ちる。杖を両手に袴と掴んで根を極め、ガツしりと腰を据ゑ、欄干のない橋際を前へ九分ばかり譲つて、其處をお通り下さりませ、で、一分だけわがものに背筋へ瀧の音を浴びて蹠んで、うつくしい魔の通るのを堪へて待つたさうである。それがまた長い間なのでございますよ、あなたの前でございませう。カラ／＼、コロ／＼が直き其處にきこえたと思ひましたのが、實は其の何とも寂然とした月夜なので、遠くから響いたので、御本體は遙に遠い、お渡りに手間が取れます、寒さは寒し、さあ、然うなりませうと、がつ／＼がう／＼といふ瀧の音ともろともに、ぶる／＼がた／＼と、ふる／＼がとまらなかつたのでございませうが、話のやうで、飛でもない、何、あなた、ここに月明に一人、橋に嚙りついた男が居るのに、其のカラコロの調子一つ亂さないで、やがて澄して通過ぎますのを、さあ、鬼か、魔か、と事も大層に聞こえませうけれども、まつたく、そんな氣がいたしましたな、千鈞の重さで、すくんだ頸首へ獅嚙みついて離れようとしません、世間様へお附合ばかり少々櫛目を入れました此の素頭を捻向けて見ました處が、何と拍子ぬけにも何にも、银杏返の中背の若い婦で……娘でございますよ、妙齡の——姉さん、姉さん——私は此方が肝を冷しましただけ、餘りに對手の澄して行くのに、口惜くなつて、——今時分一人で何處へ行きなさる、——いゝえ、あの、網代へ販るんでございませうと言ひます、農家の娘で、野良仕事の手傳を濟ました晩過ぎてから、裁縫のお稽古に熱海まで通ふんだとまた申します、瘦せた按摩

だが、大の男だ、それがさ、活きた心地はなかつた、といふのに、お前さん、いゝ度胸だ、よく可怖くないね、といひますと、おつかさんに聞きました、簪を逆手に取れば、婦は何にも可怖くはないと、いたづらをする奴の目の球を狙ふんだつて、キラリと、それ、あゝ、危い、此の上目を狙はれて堪るもんでございますか。もう片手に抜いて持つて居たでございませよ、串戯ぢやありません、裁縫がへりの網代の娘と分つても、そのうつくしい顔といひ容子といひ、月夜の眞夜中、折からと申し……といつて揉み分けながらその聞手の糸七の背筋へ頭を下げた。観音様のお腰元か、辨天様のお使姫、當の娘の裁縫といふのによれば、そのまゝ、天降つた織姫のやう思はれてならない、といふのである。

かうした話、いづれの場合にも、あつて然るべき、冒険の功名と、武勇の勝利がともなはない、熱海のこの按摩さんは一種の人格しやと言つてもいい、學んで然るべしだ。

——處で、いま、修禪寺奥の院道の三寶ヶ辻に於ける糸七の場合である。

夜の霧なかに、ほのかな提灯の灯と、もに近づくおぼろにうつくしい婦の姿に對した。

糸七は其のまゝ、人格しやの例に習つた、が、按摩でないだけに、姿勢は渠と反對に道を前にして洋杖を膝に取つた、突出しては通る人の裳を妨げさうだから。で、道端へ踞んだのである。がさくと、踞込む、その背筋へ觸るのが、刈残しの小さな茄子畠で……然ういへば、いつか

番傘で蛙を聞いた時こゝに畝近く蠶豆の植つて居たと思ふ……もう提灯が前を行く……その灯とともに、枯莖に残つた澁い紫の小さな茄子が、眉をたゞき耳を打つ礫の如く目を遮るとばかりの隙に、婦の姿は通過した。

や、一人でない、銀杏返しの中背なのが、添並んで見送つたのは、按摩さんの話にくつつけた幻覺で、無論唯一人、中背など、いふよりは、すつとすらりと背が高い、そして、氣高く、姿に威がある。

その姿が山入の眞暗な村へは向かず、道の折めを、やゝ袖なゝめに奥の院へ通ふ橋の方へ、あの、道下り奥入りに、揃へて順々に行方も遙かに心細く思はれた、稻塚の數も段々に遠い處へ向つたのである。

釣橋の方からはじめは左の袖だつた提灯が、然うだ、その時ちらりと見た、糸七の前を通る前後を知らぬ間に持替へたらしい、いま其の袂に灯れる。

その今も消えないで、反つて、色の明くなつた、ちらりと映る小さな紅は、羽をつないで、二つつゝいた赤蜻蛉で、形が浮くやうで、沈んだやうで、ありのまゝの赤蜻蛉か、提灯に描いた畫か、見る目には定まらないが、態は鮮明に、其の羽摺れに霧がほぐれるやうに、尾花の白い穂が靡いて、幽な音の傳ふばかり、二つの紅い條が道芝の露に濡れつゝ、薄い桃色に見えて行く。

昭和十五年六月二十五日印刷
昭和十五年六月三十日發行

鏡花全集第二十四卷

著 者

泉 鏡 太郎
いづみ きやう たろう

發 行 者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩 波 茂 雄
いわな すすむ けい

印 刷 者

東京市下谷區二長町一番地
井 上 源 丞
いの上 げん じやう

印 刷 所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社
とっぱん印刷株式會社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

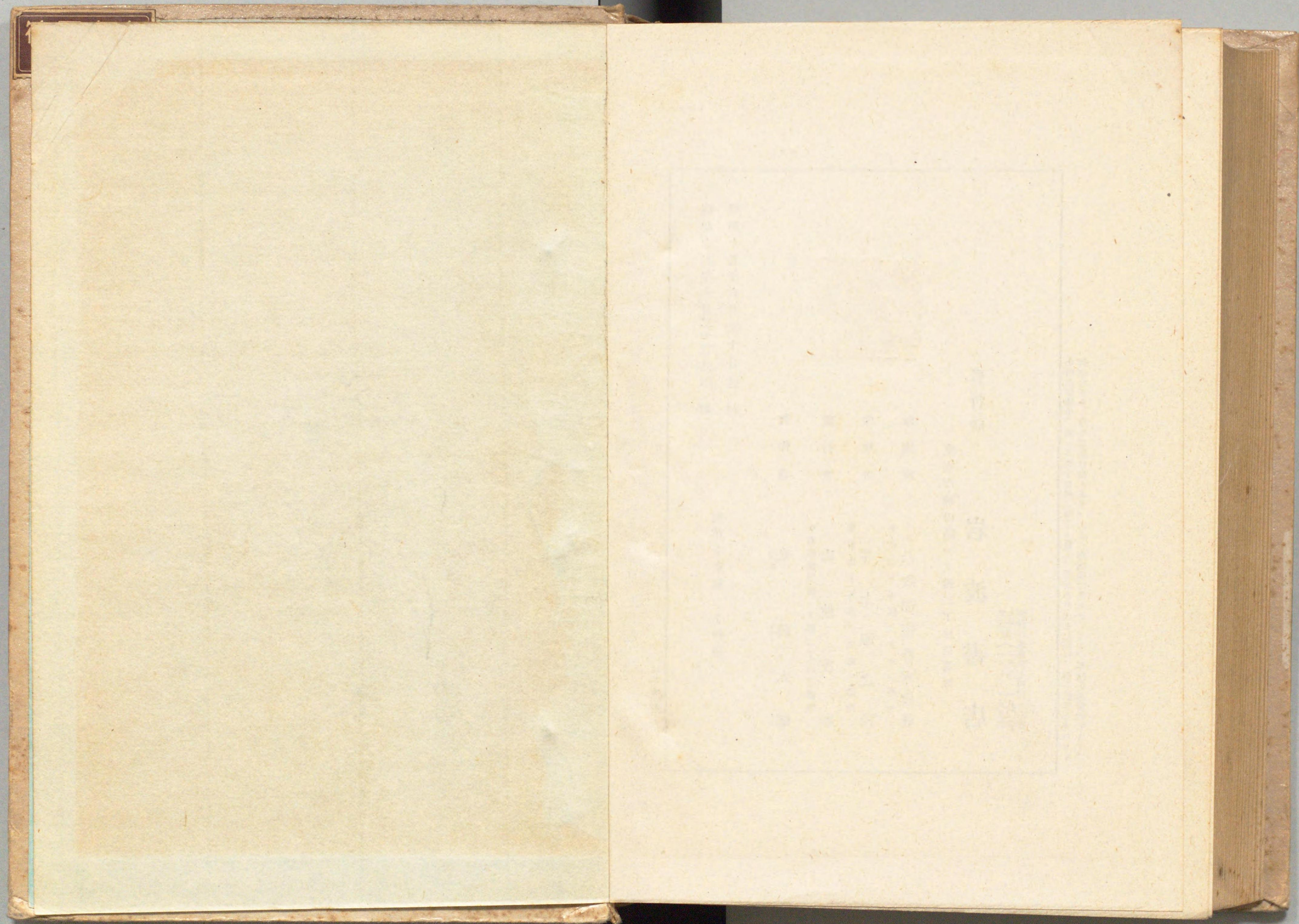
發 行 所
岩 波 書 店

電話(33)一八七・一八八番
九段(33)一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番



小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁)等がありました節は、御手数から洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましたも、早速お取替致します。

(凸版製本)



篠原書店

下谷區中根岸四〇

根岸小學校隣

